# モノグラフ・高校生'85

## vol.15 高校生と情報行動

## 目次


はじめに……2
本報告書の要約……3
第Ⅰ章　調査の意図とサンプルの特性……武内　清…6
　1．調査の意図……6
　2．サンプルの特性……7
第Ⅱ章　高校生と雑誌情報……小沼克年…10
　1．はじめに……10
　2．高校生と雑誌……11
　3．高校生の音楽感度と雑誌……17
　4．おわりに……17
第Ⅲ章　高校生と音楽情報……相馬久子…18
　1．はじめに……18
　2．高校生の音楽とのかかわり方……19
　3．好きな音楽……24
　4．音楽行動のパターン……27
　5．音楽高感度人間……30
第Ⅳ章　高校生と友人間情報……穂坂明徳…32
　1．情報としての話題……33
　2．話題の中心になれる情報感覚……37
第Ⅴ章　高校生が求める情報……明石要一…41
　1．なくなっては困る情報メディア……42
　2．高校生が欲する情報……45
第Ⅵ章　高校生の情報収集・処理パターン……田中雅文…51
　1．高校生の情報行動因子……51
　2．情報としての授業……58
　3．おわりに……62
第Ⅶ章　高校生の情報行動タイプ……武内　清…63
　1．高校生の情報行動時間の分析……63
　2．高校生の情報行動タイプ……67
資料1　調査票見本……74
資料2　基礎集計表……88


※おことわり　本文中に使用した写真は、本文・テーマとは一切関係ありません。

# 「はじめに」

毎号、テーマを決めて調査をするモノグラフ高校生も、これ
15号になり、そろそろテーマが払底してきた観がないでもない
また質問紙調査の限界やはがゆさも感じないわけではない。し
し、今回「情報」という新しいテーマで、新しいメンバー２人
加え、１年間議論を積み重ねて、データを読み込んでいく過程
徐々に新しい方途も見えてきた。

コンピューターでデータを打ち出してから、執筆までの期間
短く（約１か月半）、充分な分析ができたとは言い難いが興味深
発見も多々あり、各執筆者の持ち味も充分出すことができたと思

「音楽高感度」「情報イノベーター」「下位文化情報」「情
感度」といった新しいタームも分析の過程で飛び出し、情報
会の申し子である高校生たちが、立ち遅れた学校教育の中で生
する姿をある程度浮き彫りにすることができたと思う。

今回の調査の分析は６名の協同によるものであるが、深谷昌
放送大学教授には、終始適切なご指導を、また同人の先生方か
も貴重なご示唆を数多くいただいた。

このような調査を実施し、報告書を刊行して下さった福武書
に対し、とりわけ最初から最後までお世話になった教育研究所
加藤智禧所長、和田京子さん、田中美幸さん、藤本かずみさん
深く感謝したい。

最後になったが、お忙しい中、調査にご協力いただいた生徒
君、先生方に心からお礼申し上げる。

昭和60年６月

武内
明石要
穂坂明
田中雅
小沼克
相馬久

# 本報告書の要約

♬♪

**第Ⅰ章　調査の意図とサンプルの特性**

①　本調査では、高校生の情報行動に関するさまざまな側面の実態を明らかにする。高校生たちが、学校を支配している活字文化と学校外でひたっている新しい情報文化とのギャップにどのように対処しているのか、そこから得られる学校教育への示唆は何かを知りたいという意図に基づいている。

②　調査対象は、学校間格差と地域（都市か地方か）を考慮して選んだ10校より、2,169名（男子1,331名、女子838名／1年893名、2年911名、3年365名）である。

③　調査対象校（10校）を、「都市進学校」（2校）「都市非進学校」（2校）「都市工業高校」（2校）「地方進学校」（2校）「地方非進学校」（2校）に分け、分析のキーにすえた。

④　調査時期は、昭和59年12月～昭和60年1月である。

**第Ⅱ章　高校生と雑誌情報**

①　男子は週に2～3回、女子は月に2～3回本屋へ行くことが多い。男子は1人で、女子は友だちと、本屋へ行く。都市より地方の高校生の方が、本屋で長居をする。

②　5割前後の高校生が、雑誌・週刊誌を月に3冊以上読み、マンガは、女子（月に5冊以上27%）より男子（同42%）に好まれている。男子はマンガを自分で買って読む(49%)が、女子は友だちから借りて読むことが多い(43%)。

③　よく読まれる雑誌・週刊誌・マンガのベスト3は、男子では「少年ジャンプ」(62%)、「少年サンデー」（32%)、「少年マガジン」（29%）と少年マンガが独占し、女子では、「non－no」(36%)、「マーガレット」（33%）「セブンティーン」（32%）と、ファッション、少女マンガ、少女誌が上位を占めている。

④　マンガを読むスピードは、男子が速く、本を読む速さは、女子の方が速い。

⑤　音楽感度の高い高校生ほど、雑誌や週刊誌をよく買い、よく読んでいる。

**第Ⅲ章　高校生と音楽情報**

①　高校生の音楽とのかかわりを見てみると、音楽テープの編集7割、ミュージックビデオを見る6割、楽器の演奏ができる5割、ポップスや歌謡曲のヒットチャートに興味がある5割、音楽のおけいこごと3割、音楽サークル2割、作詞・作曲1割と、高校生の生活にとって音楽は欠かせないものとなっている。

②　男子は音楽テープの編集とミュージックビデオを見るが多く、女子は歌謡曲に興味、おけいこごとの経験、楽器がひけるが多い。成績下位のものに、歌謡曲への関心が高い。

③　高校生の好きな音楽のベスト5は、男子は、1)歌謡曲(52%)、2)ニューミュージック

(47%)、3)パンク・ディスコミュージック(23%)、4)ヘビーメタル(21%)、5)ニューウェーブ(14%)であり、女子は、3位までは同じで、(1)66%、2)59%、3)29%)、4)アニメ主題歌(14%)、5)外国のフォーク、カントリーウェスタン(12%)となっている。

④ 音楽テープを自分で編集し、ポップスのヒットチャートへの関心が高く、ミュージックビデオもよく見、音質にうるさい、楽器の演奏もうまく、作詞や作曲もする、好きな音楽のジャンルは最新流行音楽で、頻繁に貸しレコード屋に通い、ポップス系のコンサートにも出かけ、ディスコにも行く。このような「音楽高感度人間」が生まれている。彼(彼女)らは学校タイプ・成績にかかわりなく存在し、時代の感覚をリードとする旗手になる可能性がある。

## 第Ⅳ章　高校生と友人間情報

① 学校での友人との話題は、1)テレビ(60%)、2)音楽(48%)、3)異性(44%)の順に多い。全体として、マス・メディアにのった情報が多く話題になる。

② 話題には学校差があり、進学校ほど「勉強や受験」中心の話題に偏り、非進学校では「オートバイや車」の話題が多くなっている。話題に地域差や学年差を含めて考えると、情報環境の差異に生徒の話題も大きく左右されている。

③ クラスの中で「話題の中心」になれる話柄は、1)テレビ、2)音楽、3)異性、4)人気タレント、5)マンガの順に自信を示している。

④ 「話題の中心」になれる自信と学業成績との関係は、成績の良い生徒は、「勉強や受験」、「スポーツ」の話題に自信を持ち、成績のよくない生徒は、「異性」や「人気タレント」の話題が得意なようである。

⑤ 社会の情報化に向かって、今後求められる情報感覚は、例えば微妙な音の変化にも敏感であるような、全身感覚で情報を適切につかみとり、目的に対して的確に情報処理ができるような資質である。

## 第Ⅴ章　高校生が求める情報

① 高校生は生活の中で情報メディアがなくなっては困るという。とりわけテレビとレコード・テープは8割を超える者が不可欠と答えている。

② 「音楽高感度」の者は、レコード・テープを必要とするだけでなく、雑誌や映画というメディアまでも必要とする。そこから、情にうるさく、雑誌情報に敏感な情報高感度の人間が生まれてくる。

③ 高校生が欲している情報には5つのかたまりがある。それは、「進学情報」「下位文化情報」「異性情報」「部活動情報」それに「美容情報」である。そして、情報高感度の者は、下位文化と異性情報を強く欲している。

④　活字メディアや進学情報は、進学校ほど求めてはいるが、映像メディアや高校生の下位文化に関する情報を求めるのは、情報高感度の者に多い。また、情報メディアや欲する情報では、進学情報以外、従来の進学校一非進学校の軸より都市一地方という軸の方が有効性をもつ。

**第Ⅵ章　高校生の情報収集・処理パターン**

①　都市の非進学校や工業高校の高校生は、いわゆる情報洪水に流されやすい恐れがある。

②　音楽について先端的な指向をもつ者は、仲間との会話においてリーダー的役割を果たす可能性がある。

③　学業成績のあまりよくない高校生の間に、"マルチメディア人間"というイノベーターが生まれつつある。

④　授業方法の刷新という学校制度の枠内で取り扱うべき事柄に対するニーズは、学校タイプや成績よりも、むしろ余暇的生活における情報行動のパターンによって影響を受ける。つまり、雑誌や音楽との接触、流行への同調性、情報加工意欲の高い者に、授業方法の刷新ニーズが高い。

⑤　高校生や若者、あるいは高校教育というものが、情報化社会の進展に伴って、従来の枠組では次第にとらえ切れなくなってきている。

**第Ⅶ章　高校生の情報行動タイプ**

①　高校生の日頃の生活時間から、「映像行動」（テレビ、週刊誌、マンガ）、「直接コミュニケーション」（電話、外出）、「活字行動」（本、新聞、勉強）という３つの分野が区別される。

②　生活時間の配分から見ると、高校生はさまざまな情報への接触、消費の態度を身につけている。

③　都市の高校生は外出による「直接コミュニケーション」を、地方の高校生は勉強による「活字行動」をよく行っている。

④　学校タイプ・成績別に見ると、進学校や成績上位者は「活字行動」が優位で、非進学校や成績下位者は、「直接コミュニケーション」を強く求めている。

⑤　高校生の情報行動のタイプを、数量化Ⅲ類によって分類してみると、"情報高感度一低感度"および"個人志向一他者志向"という２つの分類軸によって、「情報無関心」「情報収集・整理マニア」「情報操作型」「他者情報受け入れ型」という４つのタイプが区別される。

⑥　勉強のみに専念する高校生は、「情報無関心」型になり、今後の情報化社会への適応が危ぶまれる。

# 第Ⅰ章 調査の意図とサンプルの特性

## 1．調査の意図

文字による情報伝達は、それ以前のことばやしぐさによる伝達に革命的な変化をもたらした。情報は文字によってストックされ、文字によってより広く正確に伝達されるようになった。今の学校教育は、この文字による情報伝達を純粋な形で継承している。しかし、現在の社会はめざましい技術進歩の結果として、さまざまな新しい効率的な情報伝達や処理の方法をあみ出してきた。テレビ、ラジオ、雑誌、マンガ、音楽、ビデオ、コピー、コンピューター等々が、われわれの日常生活の中にあふれている（天野郁夫「情報化と教育」『情報化と社会』東京大学出版会1984年、参照）。

新しい時代に育っている高校生たちは、伝統的な文字による情報伝達に固執する学校教育の中にあって、必ずしも幸福ではない。彼らは育ってきた環境と学校教育のギャップに対し、どのような対処をしているのであろか。

本調査では、高校生の情報行動に関するまざまな側面の実態を明らかにする。高校たちが、学校を支配している活字文化と、校外でひたっている新しい情報文化のギャップにどのように対処しているのか、そこか得られる学校教育への示唆は何かを知りたという意図に基づいている。

調査した領域は、本・雑誌の購読（Ｑ４

Q14)、テレビ視聴(Q15～Q17)、音楽(Q18～Q21)、授業方法の刷新要求(Q22)、友人との話題(Q23、Q24)、情報収集・処理態度(Q25、Q26)、ほしい情報(Q28、Q29)、生活時間(Q30)、フェイスシート(Q1～Q3、Q31～Q35)である。

分析の過程で、「音楽感度」「情報感度」というフレームも生まれた。「音楽高感度人間」「情報高感度人間」が、どのようなところから生まれ、それらは高校教育とどのようにかかわっているかも考察していきたい。

# 2. サンプルの特性

## (1)調査対象校の特色

今回の調査対象校は、2つの基準を設定して選んだ。1つは、進学校か非進学校かという、いわゆる学校間格差である。これまでの調査で、高校生の行動や意識を規定する最大のものとして学校間格差の存在が指摘されてきたので、今回の情報行動に関する調査でもそれを考慮した。もうひとつの基準は、都市か地方かということである。テレビ、ラジオ、新聞、雑誌などマスメディアの発達により情報の地域差がなくなりつつあることも考えられるが、高校生の情報行動面での地域差はどうなっているかを検討したいと考えた。

以上のような問題意識に立って、表Ⅰ－1にあげてあるような10校に調査を依頼した。

それら10校を、「都市進学校」(2校)、「都市非進学校」(2校)、「都市工業高校」(3校)、「地方進学校」(2校)、「地方非進学校」(2校)と分類して、学校タイプと名づけ、基本クロスの1つに加えた。

学校タイプ別に、生徒の基本的属性を示し

表Ⅰ－1　調査対象校の特質とサンプル数

| | | 学科 | 学校所在地 | 4年制大学志望率(%)(昭和59年) 男子 | 女子 | サンプル数(人) 全体 | 性別 男子 | 女子 | 学年別 1年 | 2年 | 3年 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 都市進学校 | A校 | 普通 | 神奈川 | 94.4 | 52.2 | 186 | 79 | 107 | 0 | 186 | 0 |
| | B校 | 〃 | 神奈川 | (85.7 | 34.3) | 164 | 81 | 83 | 0 | 53 | 111 |
| 都市非進学校 | C校 | 〃 | 神奈川 | 77.3 | 9.6 | 314 | 183 | 131 | 169 | 145 | 0 |
| | D校 | 〃 | 神奈川 | 63.0 | 11.3 | 247 | 112 | 135 | 127 | 0 | 120 |
| 都市工業高校 | E校 | 工業 | 神奈川 | 6.4 | 0.0 | 299 | 299 | 0 | 75 | 90 | 134 |
| | F校 | 〃 | 東京 | 5.3 | ／ | 140 | 139 | 1 | 140 | 0 | 0 |
| 地方進学校 | G校 | 普通 | 福岡 | 99.7 | 89.5 | 181 | 120 | 61 | 91 | 90 | 0 |
| | H校 | 〃 | 宮崎 | 92.7 | 53.1 | 253 | 140 | 113 | 0 | 253 | 0 |
| 地方非進学校 | I校 | 〃 | 岩手 | 17.9 | 1.8 | 198 | 77 | 121 | 198 | 0 | 0 |
| | J校 | 〃 | 愛知 | 96.5 | 22.6 | 187 | 101 | 86 | 93 | 94 | 0 |
| 合計 | | | | | | 2,169 | 1,331 | 838 | 893 | 911 | 365 |

(注)(　)内は58年。

表Ⅰ－2　学校タイプ別特性

(9

| | 全体 | 性別 | | 学年別 | | | 中学時の成績 | | | 現在の成績 | | | 部活動 | 将来の進路希望 | | | | | | 親学歴 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 男子 | 女子 | 1年 | 2年 | 3年 | 上(上・中の上) | 中 | 下(中の下・下) | 上(上・中の上) | 中 | 下(中の下・下) | 部活動参加率(カッコ内は運動部) | 就職 | 各種・専修学校・高専 | 短大 | 私立大学 | 国公立大学 | その他・まだ決めていない | 父・高等教育卒 | 母・高等教育卒 |
| 1.都市進学校(N＝350) | 16.1 | 45.7 | 54.3 | 0.0 | 68.3 | 31.7 | 83.5 | 13.0 | 3.5 | 18.9 | 34.9 | 46.2 | 47.5(28.9) | 6.6 | 10.0 | 14.0 | 42.9 | 17.4 | 9.1 | 51.2 | 29 |
| 2.都市非進学校(N＝561) | 25.9 | 52.6 | 47.4 | 52.8 | 25.8 | 21.4 | 8.1 | 27.8 | 64.1 | 18.8 | 29.8 | 51.4 | 34.0(23.5) | 33.6 | 24.3 | 8.8 | 14.5 | 5.0 | 13.8 | 30.1 | 14 |
| 3.都市工業高校(N＝439) | 20.2 | 99.8 | 0.2 | 49.0 | 20.5 | 30.5 | 6.1 | 22.8 | 71.1 | 27.7 | 30.0 | 42.3 | 43.5(27.4) | 60.6 | 16.7 | 2.3 | 5.3 | 2.3 | 12.8 | 18.2 | 11 |
| 4.地方進学校(N＝434) | 20.0 | 59.9 | 40.1 | 21.0 | 79.0 | 0.0 | 86.6 | 10.6 | 2.8 | 39.2 | 26.1 | 34.7 | 61.0(39.0) | 4.4 | 7.2 | 11.5 | 8.1 | 66.3 | 2.5 | 41.6 | 23 |
| 5.地方非進学校(N＝385) | 17.8 | 46.2 | 53.8 | 75.6 | 24.4 | 0.0 | 42.0 | 35.1 | 22.9 | 31.1 | 28.1 | 40.8 | 92.9(66.4) | 21.1 | 17.8 | 14.6 | 12.3 | 24.3 | 9.9 | 20.7 | 11 |
| 全体 | 100.0 | 61.4 | 38.6 | 41.2 | 42.0 | 16.8 | 41.8 | 22.2 | 36.0 | 27.0 | 29.6 | 43.4 | 54.2(36.2) | 26.6 | 15.8 | 9.9 | 15.6 | 22.3 | 9.8 | 32.0 | 17 |

たのが、表Ⅰ－2である。サンプルに多少偏りがあるので、いくつかコメントしておこう。①都市工業高校は男子中心で、そのため今回の全体サンプルの男女比は6対4となっている。②都市進学校は2～3年、地方校は1～2年、その他全学年と、学校タイプと学年が不揃いである。③中学時の成績は、都市、地方とも進学校と非進学校・工業高校の間に大きな落差がある。しかし、現在の成績は、むしろ非進学校・工業高校の方がよい場合がある。したがって、現在の成績を学校タイプを越えて比較するのには多少無理がある。(部活動（特に運動部）は、都市より地方の校で盛んである。⑤将来の進路希望の学校イプとの対応がはっきりある。これは学校選抜機能を果たしていることを示すに他ない。地方進学校は国公立大学をめざし、市進学校は私立大学をめざすという違いも確にある。⑥父母の学歴と学校タイプとの関もある。進学校には、高学歴の親が多い属性とのクロス集計を見ていく時、以上の点を考慮する必要がある。

## (2)調査対象者の特質

今回調査対象になった生徒の基本的属性は以下の通りである（総数 2,169名）。

①性　別　　（数字は%）

| 男子 | 女子 |
|---|---|
| 61.4 | 38.6 |

②学年別

| 1年 | 2年 | 3年 |
|---|---|---|
| 41.2 | 42.0 | 16.8 |

③性・学年別

| 1　年 | | 2　年 | | 3　年 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 男子 | 女子 | 男子 | 女子 | 男子 | 女子 |
| 26.0 | 15.2 | 24.2 | 17.8 | 11.2 | 5.6 |

④中学時代の成績

| 上 | 中の上 | 中 | 中の下 | 下 |
|---|---|---|---|---|
| 15.4 | 26.4 | 22.2 | 21.0 | 15.0 |

⑤現在の成績

| 上 | 中の上 | 中 | 中の下 | 下 |
|---|---|---|---|---|
| 7.3 | 19.7 | 29.6 | 24.5 | 18.9 |

⑥進路希望

| 就職 | 家　業<br>家の手伝い | 各種学校<br>専修学校 | 短大 | 私立大<br>（4年制） |
|---|---|---|---|---|
| 26.6 | 0.3 | 15.5 | 9.9 | 15.6 |

| 国公立大<br>（4年制） | その他 | まだ決めていない |
|---|---|---|
| 22.3 | 1.5 | 8.3 |

⑦部活動への参加

| 運動部熱心 | 運動部不熱心 | 文化部熱心 | 文化部不熱心 |
|---|---|---|---|
| 22.4 | 13.8 | 7.0 | 11.0 |

| 以前参加 | 不参加 |
|---|---|
| 25.3 | 20.5 |

⑧父母の学歴

| | 初等教育 | 中等教育 | 短大<br>各種学校 | 高等教育 | その他 | いない |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 父 | 24.5 | 35.5 | 2.2 | 29.8 | 4.6 | 3.4 |
| 母 | 26.2 | 49.8 | 7.3 | 10.6 | 4.5 | 1.6 |

## (3)調査時期

昭和59年12月ー昭和60年1月

## (4)調査方法

学校通しによる質問紙調査（集合記入法）。

# 第II章 高校生と雑誌情報

## 1．はじめに

現代人は、時々刻々と生産される情報のなかで暮らしている。私たちの生活空間は、同時に情報空間でもある。

情報は、普通なんらかのメディア（媒体）に乗って、私たちに届けられる。その代表的なメディアとして、新聞やテレビなどのマスコミ媒体があるが、もうひとつ忘れてならないものに、雑誌があげられよう。

この章では、現代高校生と雑誌との関係をテーマとして取りあげる。高校生が雑誌・週刊誌・マンガなどの情報と接する場は、駅前の書店、近所の本屋、コンビニエンス・ストアの雑誌コーナー等が考えられる。駅前の書店に立ち寄ってみると、下校途中の制服
高校生群が、新刊雑誌を囲んで情報交換
いる場面に出会うだろう。また、夜遅く
ビニエンス・ストアをのぞいてみると、
は普段着姿の彼らを発見するだろう。

こういうわけで、現代高校生は、さま
な場所で、さまざまな時間帯に、雑誌と
する機会を得ている。最近の学生は、「ほ
を読まなくなって論理的思考力が低下し
と嘆くのも結構であるが、まずは、現代
生と雑誌とのつきあいを、実態に即して
おく必要があるように思う。

# 2. 高校生と雑誌

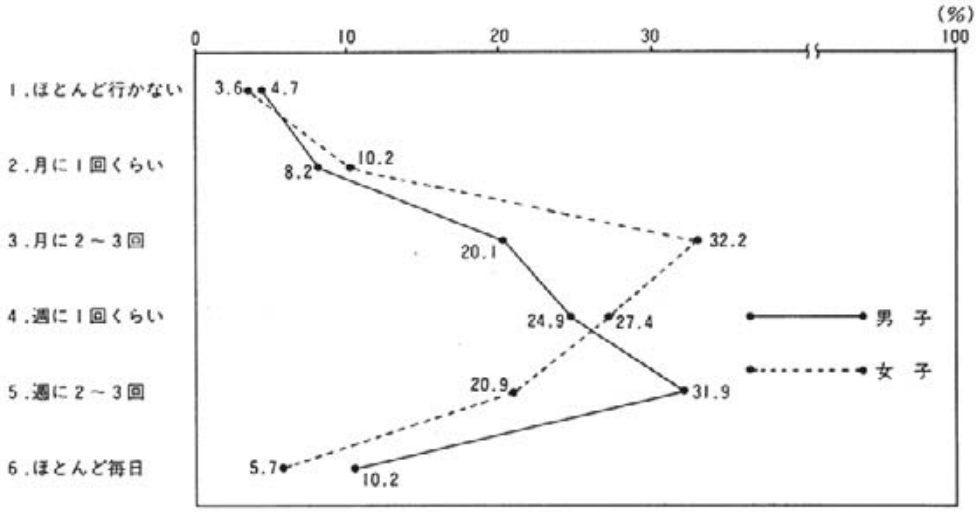
## (1)本屋とのかかわり

ほとんどの高校生は、月に最低1回は本屋に足を運んでいる（全体で96%)。ひと月に本屋に行く回数を平均してみると、男子は7.8回、女子は7.0回であり、男子のほうが若干多い。図II－1によれば、回数のピークは、男子が「週に2～3回」(32%)、女子が「月に2～3回」（32%強）である。

本屋に行って、どれくらいの時間を過ごすのかといえば、地方の高校生のほうが、都市の高校生よりも長居している傾向があるようだ（表II－1)。

それでは、本屋に行くとき、だれといっしょに行くことが多いのだろうか。表II－2によれば、男子は「1人で」（59%）、女子は「友だちと」（60%）と、それぞれ6割近くを占めている。地方の非進学校の女子は、実に8割の者が、「友達と」本屋へ行っている。なお、学年別でみると、学年を追うにつれて、「1人で行く」者が増えている（1年生・45%、2年生・49%、3年生・68%)。

図II－1　ひと月に本屋にどのくらい行くか



表II－1　本屋に行くと、どのくらい店にいるか

(%)

| | 5分以内 | 10分くらい | 20～30分くらい | 1時間以上 |
|---|---|---|---|---|
| 都市の高校生 | 16.3 | 38.2 | 39.3 | 6.2 |
| 地方の高校生 | 4.0 | 24.0 | 61.0 | 11.0 |

表II－2　本屋にだれといっしょに行くか

(%)

| 項目＼属性 | | 男子 | | | | | 女子 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 都市進学校 | 都市非進学校 | 都市工業高校 | 地方進学校 | 地方非進学校 | 都市進学校 | 都市非進学校 | 都市工業高校 | 地方進学校 | 地方非進学校 |
| 本屋にだれと行くか | 1人で | 59.4 | | | | | 36.9 | | | | |
| | | 67.7 | 60.7 | 61.2 | 59.6 | 45.2 | 45.3 | 42.9 | 100.0 | 42.2 | 16.9 |
| | 友だちと | 38.9 | | | | | 59.7 | | | | |
| | | 31.6 | 37.6 | 36.7 | 39.2 | 52.5 | 52.1 | 53.8 | 0.0 | 53.2 | 80.2 |

## (2)読む冊数、読む方法

本屋は、出版形式のメディアを、需要者に提供・供給するエージェントであるといえよう。高校生も何かの情報を求めて本屋へ行くのであろうが、ここでは、一般書籍はひとまずおいて、雑誌・週刊誌・マンガに限ってデータを見てゆこう。

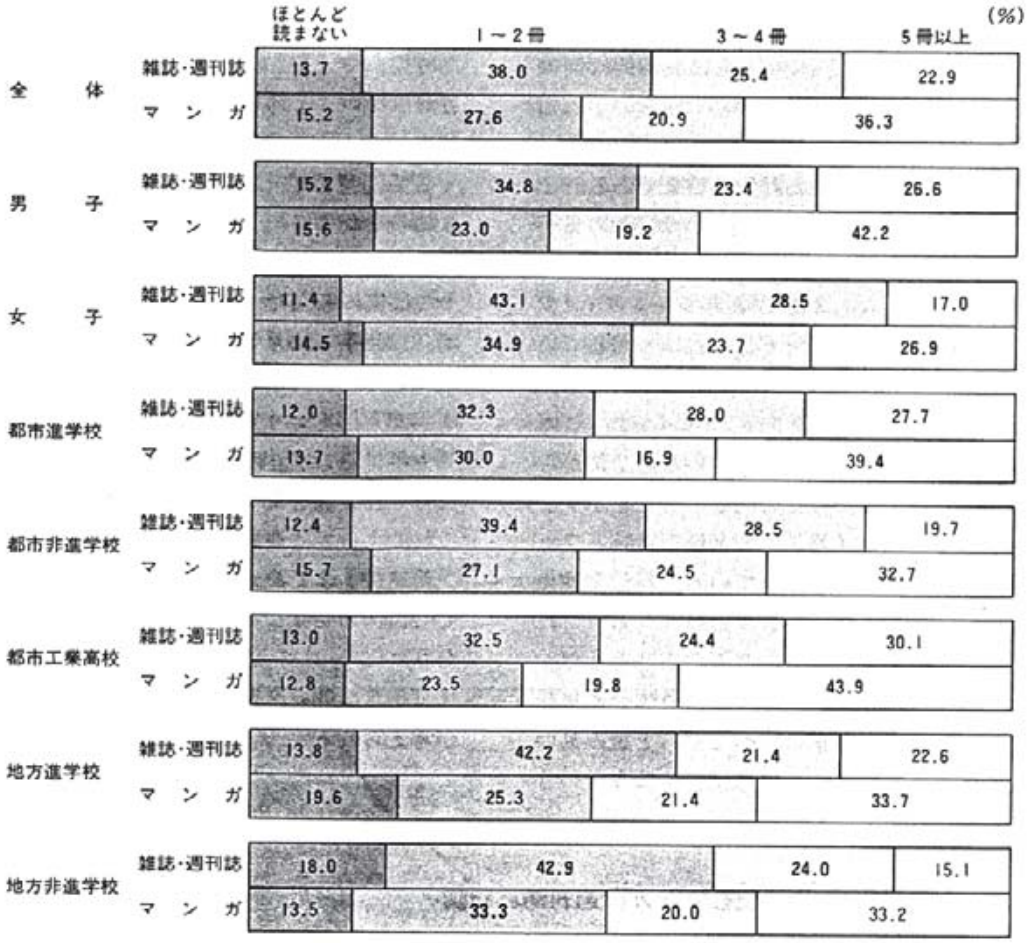
雑誌・週刊誌・マンガなどを、高校生は月に何冊くらい読むのだろうか。図II－2によれば、5割前後の高校生が、月に3冊以上読んでいる(「3－4冊」と「5冊以上」を合わせた場合)。マンガについては、男子のマンガ好きがうかがわれる。「5冊以上」読む男子が42%であるのに対して、女子のそれは27%である。

では、どんな方法でマンガを読むことが多いのか。表II－3にまとめたところによると「自分で買って」読む者が、男子は49%、女子は36%であり、全体では44%である。「自分で買って」に続く読み方としては、

| | | (全体) |
|---|---|---|
| 2位 | 「友だちから借りて」 | 27% |
| 3位 | 「店頭で立ち読み」 | 13% |

があげられる。ただし女子についていえば、「友だちから借りて」が1位（43%）であり「自分で買って」は2位（36%）になっている。また、都市、地方を問わず、進学校の生徒は、非進学校の生徒に比べて、自分で買って読むよりも、友だちから借りたり、本屋の店頭で立ち読みしている傾向が見られる。

図II－2　ひと月に何冊くらい読むか




表II－3　マンガをどのような方法で読むことがいちばん多いか

(%)

| 属性 / 項目 | | 男子 | | | | | 女子 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 都市進学校 | 都市非進学校 | 都市工業高校 | 地方進学校 | 地方非進学校 | 都市進学校 | 都市非進学校 | 都市工業高校 | 地方進学校 | 地方非進学校 |
| マンガをどんな方法で読むことが多いか | 自分で買って読む | 49.3 | | | | | 36.0 | | | | |
| | | 39.2 | 59.3 | 56.7 | 30.5 | 51.1 | 25.9 | 48.5 | 0.0 | 26.6 | 37.2 |
| | 友だちから借りて読む | 16.0 | | | | | 43.4 | | | | |
| | | 29.1 | 14.9 | 14.9 | 11.6 | 15.2 | 50.8 | 34.6 | 100.0 | 51.4 | 41.1 |
| | 店頭で立ち読みする | 17.2 | | | | | 7.4 | | | | |
| | | 15.2 | 11.5 | 11.0 | 33.2 | 20.2 | 9.0 | 4.9 | 0.0 | 8.1 | 8.7 |
| | マンガはほとんど読まない | 10.7 | | | | | 8.3 | | | | |
| | | 10.1 | 8.5 | 10.8 | 15.8 | 7.3 | 10.1 | 5.6 | 0.0 | 8.1 | 10.1 |

## (3)何を読むか

マンガを読む冊数や、読む方法を見てきたところで、次に、高校生たちは具体的に何の雑誌・週刊誌・マンガを読んでいるのか、知りたいところである。表II－4は、それらを全体と性別について集計した結果である。これを見ればわかるように、マンガ好きの男子の影響を反映してか、全体順位のベスト3誌と、男子のベスト3誌(『少年ジャンプ』『少年サンデー』『少年マガジン』)は一致している。そして、女子のベスト3誌(『non-no』『マーガレット』『セブンティーン』)は、全体順位の4位～6位に対応している。7位から15位の雑誌は、高校生の関心の所在を示すように、オートバイ雑誌、音楽情報雑誌、ファッション雑誌があげられている。現代高校生の興味・関心を理解しようと思ったら、これら15誌に目を通してみる必要がありそうだ。

『朝日ジャーナル』は、筑紫哲也が編集長になってから、以前に比べてぐっと読み易い誌面になったにもかかわらず、やはりというべきか、高校生の人気はつかんでいない（全体で0.5%)。また、正面きって高校生を読者対象においているはずの『高○コース』『高△時代』や『螢雪時代』が、ことのほか支持者が少ない（1%くらい）のはどうしたわけか。

さて、ベスト・スリーを占めているマンガ3誌のなかでも、『少年ジャンプ』は、ひときわ高い人気を博している（全体で40%、男子では実に62%)。『少年ジャンプ』(集英社)は、1968年に10万5,000部で創刊したというが、1984年12月発行の「年末年始合併号」では、403万部という驚くべき数字を記録した。『少年ジャンプ』が重視しているのが、毎号12万～13万通も寄せられる愛読者アンケート。これによって「連載打ち切り」「延長」から「新連載」まで決められるという。そこで、≪「読者」の明確なイメージと戦略――このあたりに『ジャンプ』急伸の秘密があるようだ≫（『毎日新聞』2月18日朝刊）との理由づけが考えられる。

表II－4　ふだんよく読むマンガ、週刊誌、雑誌

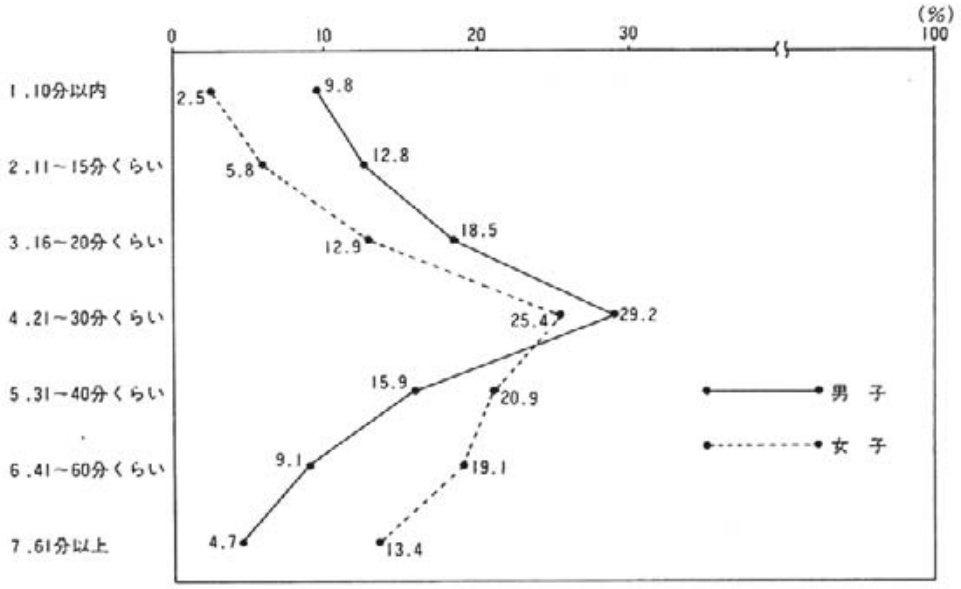
| 順位 | 全体 | % | 男子 | % | 女子 | % |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 少年ジャンプ | 39.7 | 少年ジャンプ | 62.2 | non・no | 36.4 |
| 2 | 少年サンデー | 19.5 | 少年サンデー | 31.5 | マーガレット | 33.3 |
| 3 | 少年マガジン | 17.6 | 少年マガジン | 29.2 | セブンティーン | 31.9 |
| 4 | non・no | 13.3 | オートバイ | 14.9 | りぼん | 18.4 |
| 5 | マーガレット | 12.7 | ヤングジャンプ | 9.6 | 明星 | 17.9 |
| 6 | セブンティーン | 11.7 | びあ | 9.2 | プチセブン | 15.3 |
| 7 | 明星 | 10.7 | FMレコパル | 8.7 | 少女フレンド | 13.1 |
| 8 | オートバイ | 9.0 | Hot Dog Press | 7.5 | 少年ジャンプ | 12.5 |
| 9 | びあ | 7.6 | 明星 | 7.5 | オリーブ | 10.1 |
| 10 | りぼん | 7.3 | POPEYE | 5.9 | 花とゆめ | 9.0 |
| 11 | プチセブン | 5.7 | GORO | 5.7 | マイバースデー | 8.9 |
| 12 | ヤングジャンプ | 5.6 | モーターサイクリスト | 5.6 | an・an | 7.4 |
| 13 | FMレコパル | 5.2 | ホリデーオート | 5.6 | 少女コミック | 7.0 |
| 14 | 少女フレンド | 4.9 | ビッグコミック | 5.1 | びあ | 6.5 |
| 15 | POPEYE | 4.8 | ミュージックライフ | 4.5 | 平凡 | 5.4 |

## (4)読むのにかける時間

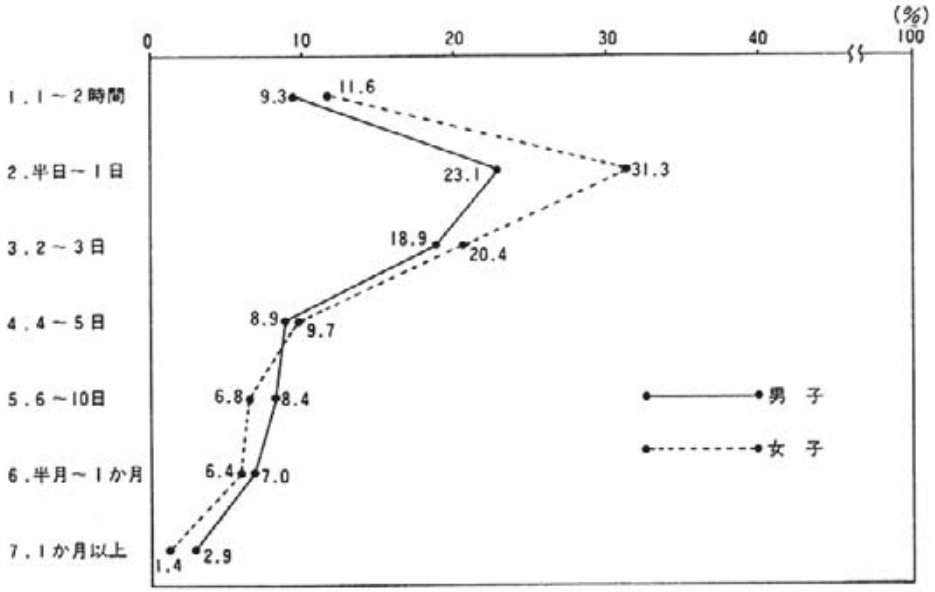
以上に見たように、マンガ誌は、現代高校生（とりわけ男子）のよく親しんでいる出版メディアである。では、彼らはマンガ誌を1冊読むのに、どれだけ時間をかけて（かかる、ではない）いるのか。図II－3を見てみよう。これによれば、男女ともに、1番多い回答は、「21～30分くらい」（男子・29%、女子・25%）である。しかし、マンガ1冊をこなす時間は、女子よりも男子のほうがスピーディな傾向にある。10人に1人の男子は、1冊を10分以内で処理してしまう。マンガ好きの男子のことであるから、なにか秘訣でももっているのかもしれない。

ちなみに、「文庫本の小説を1冊読むのにかかる時間」（図II－4）では、男子よりも女子のほうが速いようだ。図には省いたが「どれくらい時間がかかるかわからない」と答えた者が、男子は22%、女子は12%である。これを、「普段あまり小説を読んだことがないので、かかる時間がわからない」者と考えれば、男子は女子に比べて、活字を追っていくことが苦手といえるだろう。「わからない」者の割合は、進学校（9%）よりも非進学校（24%）に多く、また、成績上位者（16%）よりも成績下位者（22%）に多い。

図II－3　マンガ・週刊誌を1冊読むのにかける時間



図II－4　文庫本の小説を1冊読むのにかかる時間



# 3. 高校生の音楽感度と雑誌

私たちは、本報告書を作成するにあたり、高校生の「音楽感度」をランクづける試みをした。これは、Q18のE、G、HおよびIの4項目を用いて、高校生の「情報感度」を高低の尺度で4ランクに分類したものである。

感度Ⅰ　感度Ⅱ　感度Ⅲ　感度Ⅳ
音楽高感度　音楽低感度

これら4ランクの属性と、雑誌・週刊誌との接触状況をみたのが、表Ⅱ－5である。この表から明らかなように、音楽感度の高い高校生ほど、ひと月に買ったり読んだりする雑誌や週刊誌の冊数が多い。

表Ⅱ－5　雑誌・週刊誌を買う、読む冊数(音楽感度別)

高 ←→ 低

| 項目＼音楽感度 | 感度Ⅰ | | 感度Ⅱ | | 感度Ⅲ | | 感度Ⅳ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 買う冊数 | 2.5冊 | > | 2.0冊 | > | 1.7冊 | > | 1.5冊 |
| 読む冊数 | 4.1冊 | > | 3.2冊 | > | 3.0冊 | > | 2.4冊 |

# 4. おわりに

少ない紙数で、現代高校生と雑誌・マンガとのつきあいを見るのは難しい。しかし、これまでの記述で、ある程度のイメージは浮きあがってきたと思われる。

一番必要な分析は、ハードな量的データの分析よりも、ソフトな質的データの分析であろう。これは今後の調査研究に期待したいところである。

# 第III章 高校生と音楽情報

## 1．はじめに

今回、高校生の情報行動をさまざまな角度から分析するという試みにおいて、特に音楽に関する調査項目を設けた。高校生にとって音楽とは、おそらく生活の中にかなりの程度までしみこんでいる「必需品」であろう。また情報行動の展開される領域の重要な一部分が音楽をめぐってなされている。実際のデータを見てみると、友達と「音楽のこと」を話題にしている高校生は8割以上いる。「この世から、レコード・テープ」がなくなってしまったら「とても困る」という高校生も5割以上いる。さらに、「勉強するとき、音楽をききながらの方が効率が上がる」という者も3割いる。このように、現代の高校生にとって、音楽なしの生活はおよそ考えられない。

本章では、三つの視点から、高校生の音楽とのかかわりを考察する。第一に、さまざまな情報の中の一種類として音楽に関するものを位置づける。第二に、「楽器を演奏する」「レコードを聴く」「コンサートに行く」などの音楽行動をコミュニケーションとして把握する。これには、音楽そのものを情報ととらえる記号論的レベルから、音楽を介在させた自己内的なコミュニケーション、アーチストとのコミュニケーション、聴衆間のコミュニケーション等、いくつかのレベルが考えられる。第三にそのような音楽行動のパターンが情報行動全般のパターンとどのような関係にあるのかを分析する。この分析のために、「音楽感度」という変数を合成した。

# 2. 高校生の音楽とのかかわり方

最初に高校生の音楽とのかかわり方の実態を見てみよう(表Ⅲ－1)。

まず全体を見ると、「音楽テープを編集」することがある（よく＋ときどきある）が7割と多い。ダブルカセットデッキの開発などオーディオ機器の性能がよくなったこと、貸しレコード屋が身近に存在するようになったことなども背景にあるであろう。「音楽を聴くとき、音質をとても気にする」は4人に1人であるが「やや気にする」を含めると3分の2に達する。

「楽器を何か演奏する」ことができるは、「あまり上手でないができる」（39%）まで含めると過半数が何かしら楽器を演奏することができると答えている。「自分で作詞や作曲をする」者は7人に1人いる。この回答に

表Ⅲ－1　音楽とのかかわり方

(%)

| 項目 ＼ 属性 | 全体 | 性別 男子 | 性別 女子 | 学校タイプ・成績 進学校 上・中の上 | 進学校 中の下・下 | | 非進学校 上・中の上 | 非進学校 中の下・下 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| A. 音楽関係のクラブやサークルに 今入っている／以前入っていたが今はやめた | 24.2 | 17.4 | < 34.9 | 30.6 | < (33.9) | > | 17.1 | < 20.6 |
| B. おけいこごとで楽器を 今習っている／以前は習っていたが今は習っていない | 34.1 | 17.0 | < 61.1 | (51.2) | 49.8 | > | 24.9 | 23.6 |
| C. 楽器を何か演奏することが できる | 53.4 | 41.7 | < 71.8 | 62.6 | (63.5) | > | 52.3 | > 43.2 |
| D. 自分で作詞や作曲を よくする／ときどきする | 14.8 | 12.3 | < 18.5 | 13.2 | < (20.2) | | 12.0 | 15.5 |
| E. 自分で音楽テープを編集することが よくある／ときどきある | 70.7 | 73.8 | > 65.8 | 68.8 | < (74.6) | | 64.3 | < 73.5 |
| F. 歌謡曲のヒットチャートに興味が とてもある／かなりある | 48.8 | 43.9 | < 56.6 | 41.4 | 40.4 | < | 48.6 | < (53.1) |
| G. ポップスのヒットチャートに興味が とてもある／かなりある | 54.1 | 54.0 | 55.7 | 51.1 | (56.7) | | 56.0 | 54.0 |
| H. ミュージックビデオを よく見る／ときどき見る | 63.5 | 68.0 | > 56.4 | 62.1 | (67.6) | | 63.4 | 65.6 |
| I. 音楽を聴くとき、音質を とても気にする／やや気にする | 75.2 | 76.9 | 72.6 | 77.0 | (79.8) | | 73.1 | 74.8 |

◯＝学校タイプ・成績の最高値

は、必ずしも歌を作る目的でない「詩」の創作も含まれている可能性がある。ヒットチャートについては、「歌謡曲」のそれよりも、「ポップス」についての方に興味を持っている者が多い。

次に男女別に、音楽とのかかわりの違いを見てみよう。「音楽関係のクラブやサークル」に入ったことのある者、「おけいこごと」の経験がある者、「楽器の演奏」ができる者の比率は、それぞれ男子よりも女子の方が断然多い。また、「ポップス」のヒットチャートに興味があるかどうかは男女で差がないにもかかわらず、「歌謡曲」のヒットチャートとなると、女子の方がより興味を示している。逆に、男子の方に多いのは、「自分で音楽テープを編集」すること、「ミュージックビデオ」を見ることであった。

次に、学校タイプ別も加味して考察してみよう。図Ⅲ－1は男子生徒の場合であり、図Ⅲ－2は女子生徒の場合である。都市でも地方でも進学校の方が、「音楽関係クラブ」に入ったことや「おけいこごと」の経験が多く、楽器を演奏できる者が多い。これは女子生徒に関してもっとはっきり現れる。

都市工業高校では、「おけいこごと」をしている者が最も少ないにもかかわらず、4割以上が「楽器を演奏」できると回答している。おそらく、ギターやドラム、シンセサイザーなどを独学で修得しているのであろう。歌謡曲のヒットチャートへの興味は、地方進学校で最も少なく、地方非進学校との差が開いている。

次に、音楽のかかわり方と成績との相関を見てみよう。表Ⅲ－1は、進学校と非進学校(工業高校を含む)のそれぞれで、成績が「上、中の上」の者、「中の下、下」というように分類し、三重クロスさせてみたものである。「音楽関係クラブに入った」ことのある者は、先程見たように進学校に多いが、進学校でも非進学校でも成績「中の下、下」の者に多いことがわかる。「おけいこごと」の経験は、進学校の成績上位者に多い。「歌謡曲のヒットチャート」に興味がある者は、非進学校の成績下位者に多い。「自分で音楽テープを編集」する者は、進学校－非進学校間には差がないが、いずれも成績下位者に多い。「作詞、作曲をする」者は、進学校の成績下位者に特に多い。全体を見ると、進学校の成績下位者が、最も音楽とのかかわり方が活発であるといえよう。

図Ⅲ－3は、希望進路別に、音楽とのかかわりを見たものである。上から4つ（D作詞作曲、A音楽サークル、Bおけいこごと、C楽器演奏）までは「短大希望」（女子がほとんど）を除いて、国立4年制大学志望者、私立4年制大学志望者、各種学校・専修学校志望者、就職志望者の順で高い肯定的回答をしている。ところが、「歌謡曲のヒットチャート」については、その順番がきれいに入れかわっている。後の4つ(Gポップスのヒットチャート、Hミュージックビデオ、Eテープ編集、I音質）はほとんど差がない。

父親の学歴との関連を見ると、父親の学歴の高いほど、A（音楽サークル)、B(おけいこごと)、C（楽器の演奏）について肯定的回答が多くなっている。

表Ⅲ－2は、高校生の音楽へのかかわり方を因子分析にかけた結果である。

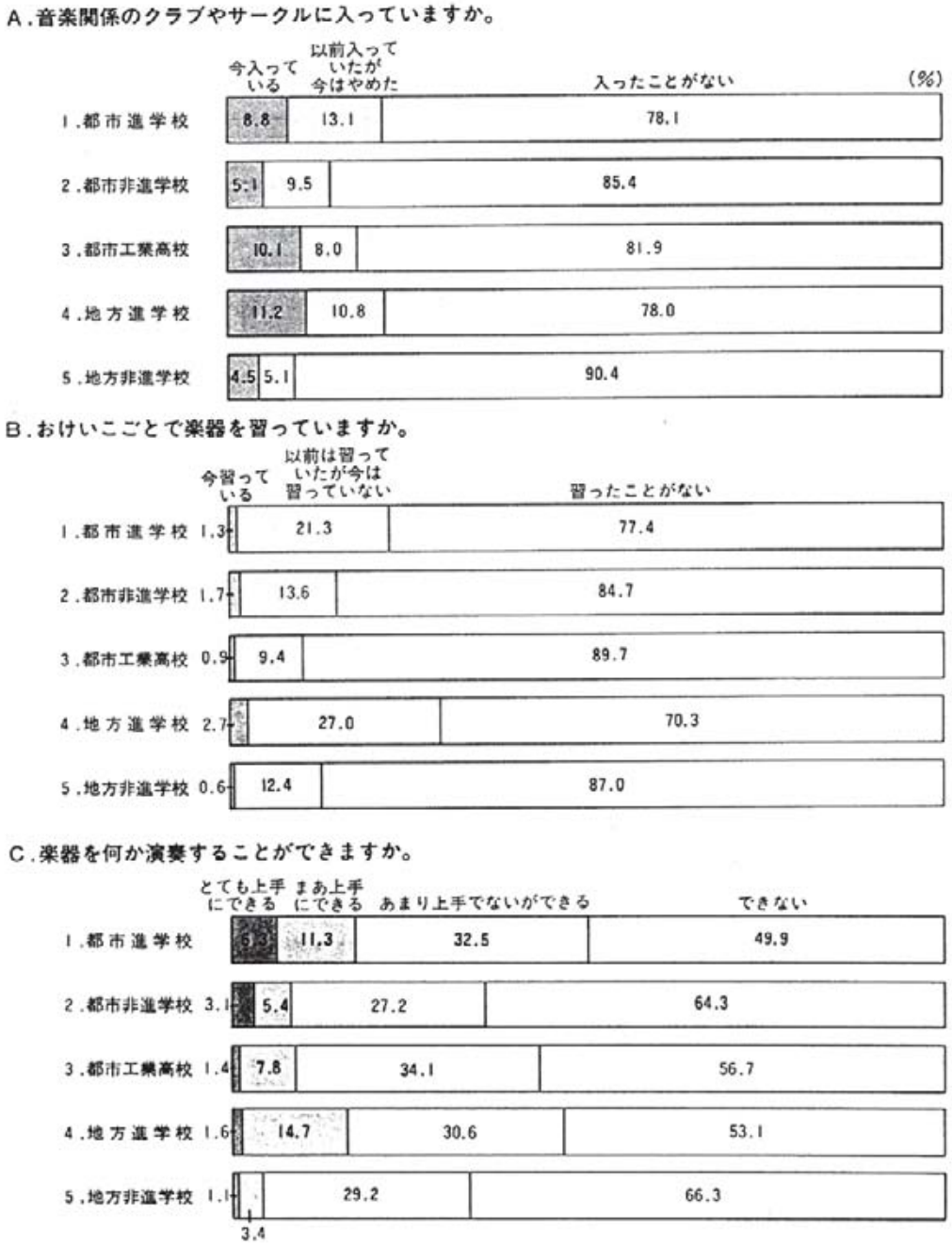
「クラシック・おけいこ型」（第1因子)、「音楽高感度人間」（第2因子)、「ポピュラー・歌謡曲好き」(第3因子）という三つの因子のあることがわかる。

「クラシック・おけいこごと」因子は、女子、あるいは優等生のイメージと結びつきそうである。

第2因子を、「音楽高感度人間」と名づけ、この因子の性格づけに最も寄与している4つの質問(「テープを編集する」「ミュージックビデオをよく見る」「ポップスのヒットチャートに興味がある」「音楽を聴くとき、音質を気にする」)の回答の尺度に得点を与え、回答者各人について音楽高感度得点を算出し、高得点順に並べた上で、上から23%、28%、30%、19%の割合でグループ分けした。音楽感度の最

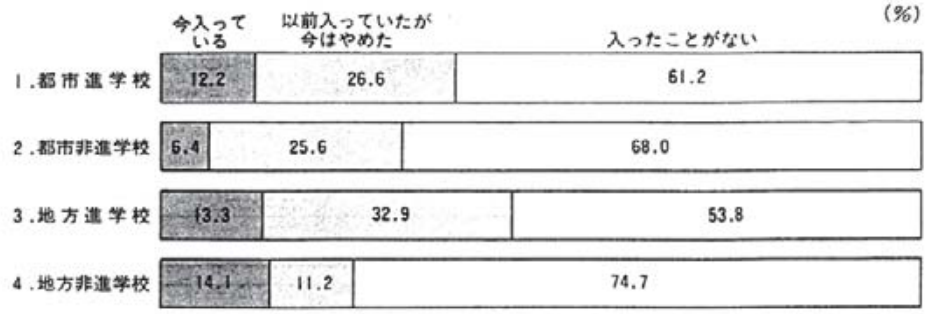
も高いグループⅠを「音楽高感度人間」と呼ぶことにする。彼らは、「音楽テープの編集」をよくやり、「ポップスのヒットチャート」にとても興味を持ち、「ミュージックビデオ」をよく見、音楽を聴くとき、「音質」にこだわる人間である。表Ⅲ－3に見るように、彼（彼女）らは、「おけいこごと」はそれほどやっていないものの、音楽行動が活発であることがわかる。「音楽感度」変数は以下各章で独立変数として用いられる。「音楽高感度人間」がどんな高校生達を表しているのかは、本章の最後で分析する。

図Ⅲ－1　音楽とのかかわり方×学校タイプ（男子）

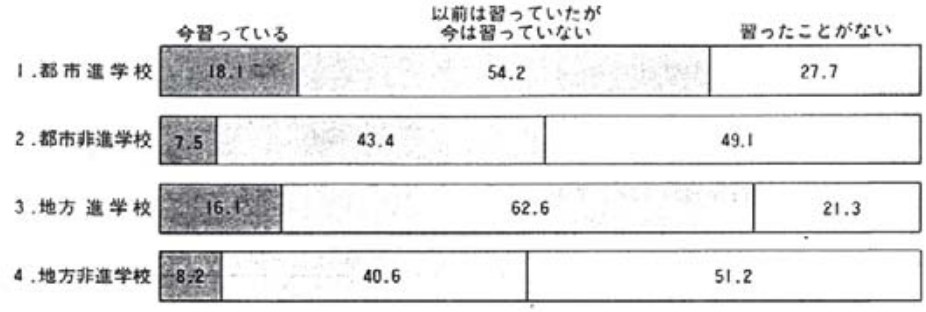


## 図Ⅲ－2　音楽とのかかわり方×学校タイプ(女子)

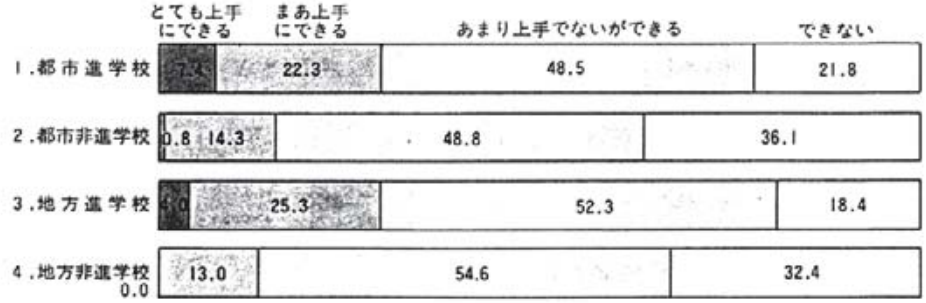
A.音楽関係のクラブやサークルに入っていますか。



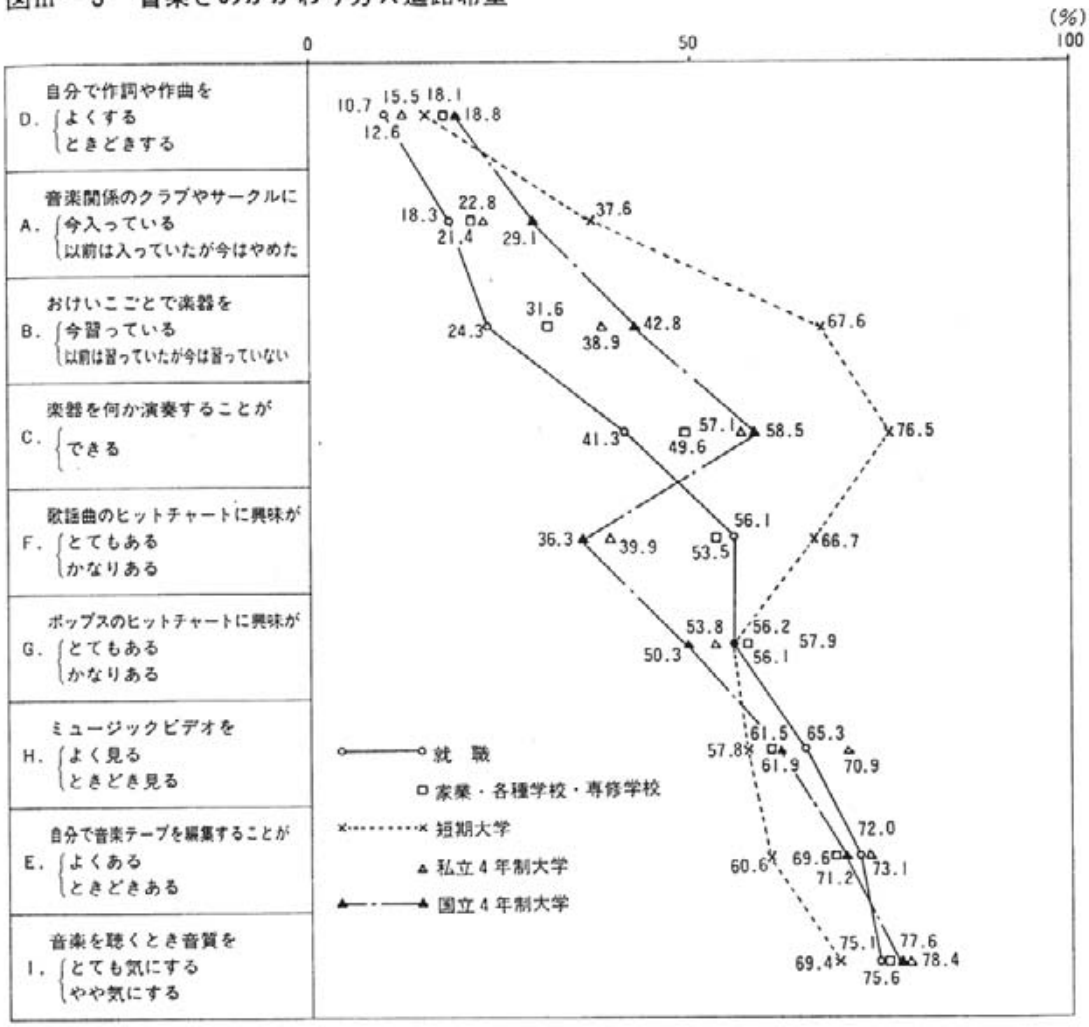

B.おけいこごとで楽器を習っていますか。




C.楽器を何か演奏することができますか。



図Ⅲ－3　音楽とのかかわり方×進路希望




表Ⅲ－2　音楽とのかかわりのパターン(因子分析結果)

| 因子名 / 項目 | 第1因子 | 第2因子 | 第3因子 |
|---|---|---|---|
| | クラシック・おけいこ型 | 音楽高感度人間 | ポピュラー・歌謡曲好き |
| A.音楽系サークルに入る | 0.54842 | 0.10759 | −0.07979 |
| B.楽器を習っている | 0.61124 | −0.08052 | 0.07258 |
| C.楽器を演奏できる | 0.83071 | 0.10361 | 0.05038 |
| D.自分で作詞や作曲をする | 0.39871 | 0.14953 | −0.08985 |
| E.テープを編集する | 0.10734 | 0.52476 | 0.08288 |
| F.歌謡曲のヒットチャート | −0.03377 | 0.08729 | 0.59773 |
| G.ポップスのヒットチャート | −0.02558 | 0.58451 | 0.62090 |
| H.ミュージック・ビデオをよく見る | 0.00365 | 0.61778 | 0.09658 |
| I.音質を気にする | 0.13098 | 0.56339 | 0.05549 |

表Ⅲ－3　音楽とのかかわり方×音楽感度

(%)

| 項目 ＼ 音楽感度 | 音楽感度 高い ← → 低い I | II | III | IV |
|---|---|---|---|---|
| A. 音楽関係のクラブやサークルに 今入っている / 以前入っていたが今はやめた | (28.5) > | 25.6 | 24.6 > | 16.5 |
| B. おけいこごとで楽器を 今習っている / 以前習っていたが今は習っていない | 34.6 | 33.9 | (37.3) > | 28.4 |
| C. 楽器を何か演奏することが できる | (19.6) | 16.3 | 13.7 > | 8.1 |
| D. 自分で作詞や作曲をすることが よくある / ときどきある | (18.4) | 17.7 > | 14.6 > | 6.4 |
| E. 歌謡曲のヒットチャートに興味が とてもある / かなりある | (58.8) > | 54.3 > | 50.6 > | 26.9 |

◯＝最高値

# 3. 好きな音楽

次に、高校生はどんな種類の音楽を好むのかを見てみよう。この調査では、音楽のジャンルをなるべく細かく分けた。

全体の傾向を見ると、「歌謡曲」（57%）、「ニューミュージック」（52%）が双璧である。以下、「パンク・ディスコミュージック」（26%）「ヘビーメタル」（15%）と続く。ベスト10は表Ⅲ－4を見ていただきたい。

男女別のベスト10を図Ⅲ－4に示した。上位3つは男女共通しているが、女子の場合、「アニメ主題歌」が4位にきており、男子のベスト10に入っていないフォーク系が5位と7位にある。男子の場合、「ヘビーメタル」「フュージョン」「演歌」が女子のベスト10圏外のものである。いわゆるクラシックで男女ともにベスト10に入っているのは「交響曲・管弦楽曲・協奏曲」であり、女子で6位、男子で10位となっているが、比率で見るとそれほど差はない。

学校タイプ、成績、進路希望別に見てみよう。

都市と地方で差が現れたのは、「パンク、ディスコミュージック」（都市28%、地方21%）、「外国のフォーク、カントリーウエスタン」（都市8%、地方14%）であった。

表Ⅲ－4は学校タイプと成績との三重クロスの結果である。進学校と比べ非進学校で好まれるのは、「歌謡曲」と「ヘビーメタル」であり、逆に進学校の方では「ニューウェーブ」「交響曲・管弦楽曲・協奏曲」「フュージョン」である。進学校、非進学校にかかわらず、成績上位者よりも成績下位者の方が好むのは「パンク・ディスコミュージック」である。

同じ表で進路希望との関係を見てみよう。「歌謡曲」「ニューミュージック」を好む者が最も多いのは「短大希望」、最も少ないのが「国立4年制大学希望」である。「国立4年制大学希望」及び「私立4年制大学希望」に好

## 表Ⅲ－4　好きな音楽×属性

(%)

| 全体での順位 | 好きな音楽 | 学校タイプ・成績 | | | | | 進路希望 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 進学校 | | | 非進学校 | | 就職 | 各種専修学校 | 短期大学 | 4年制私立大学 | 4年制国立大学 |
| | | 上中の上 | 中の下下 | | 上中の上 | 中の下下 | | | | | |
| 1 | 歌謡曲 | 40.9 | 48.5 | < | 62.0 | 61.5 | 65.1 | 61.7 | 79.3 | 46.7 | 42.3 |
| 2 | ニューミュージック | 51.9 | 47.2 | | 50.0 | 51.8 | 53.2 | 51.9 | 63.8 | 50.6 | 47.7 |
| 3 | パンク・ディスコミュージック | 19.1 < | 31.9 | | 23.4 < | 31.3 | 31.3 | 24.9 | 23.0 | 22.2 | 22.6 |
| 4 | ヘビーメタル | 14.5 | 12.7 | < | 17.0 | 18.5 | 15.1 | 16.6 | 6.1 | 16.8 | 16.7 |
| 5 | アニメ主題歌 | 9.8 < | 13.4 | | 14.3 | 13.7 | 12.3 | 17.2 | 13.1 | 10.5 | 15.9 |
| 6 | ニューウェーブ | 16.6 | 14.0 | > | 12.3 | 11.8 | 10.5 | 11.6 | 8.9 | 12.9 | 16.9 |
| 7 | テクノポップス | 14.0 | 12.7 | | 13.2 | 13.1 | 13.1 | 13.1 | 8.9 | 12.0 | 14.0 |
| 8 | 交響曲・管弦楽曲・協奏曲 | 14.9 | 15.0 | > | 7.0 | 6.9 | 6.0 | 8.9 | 7.5 | 14.1 | 15.5 |
| 9 | 外国のフォーク・カントリーウエスタン | 14.9 > | 9.8 | | 9.1 | 9.5 | 8.4 | 10.1 | 14.6 | 9.0 | 12.1 |
| 10 | フュージョン(クロスオーバー) | 14.0 | 16.3 | > | 8.2 | 5.8 | 4.9 | 9.5 | 7.0 | 13.5 | 13.0 |

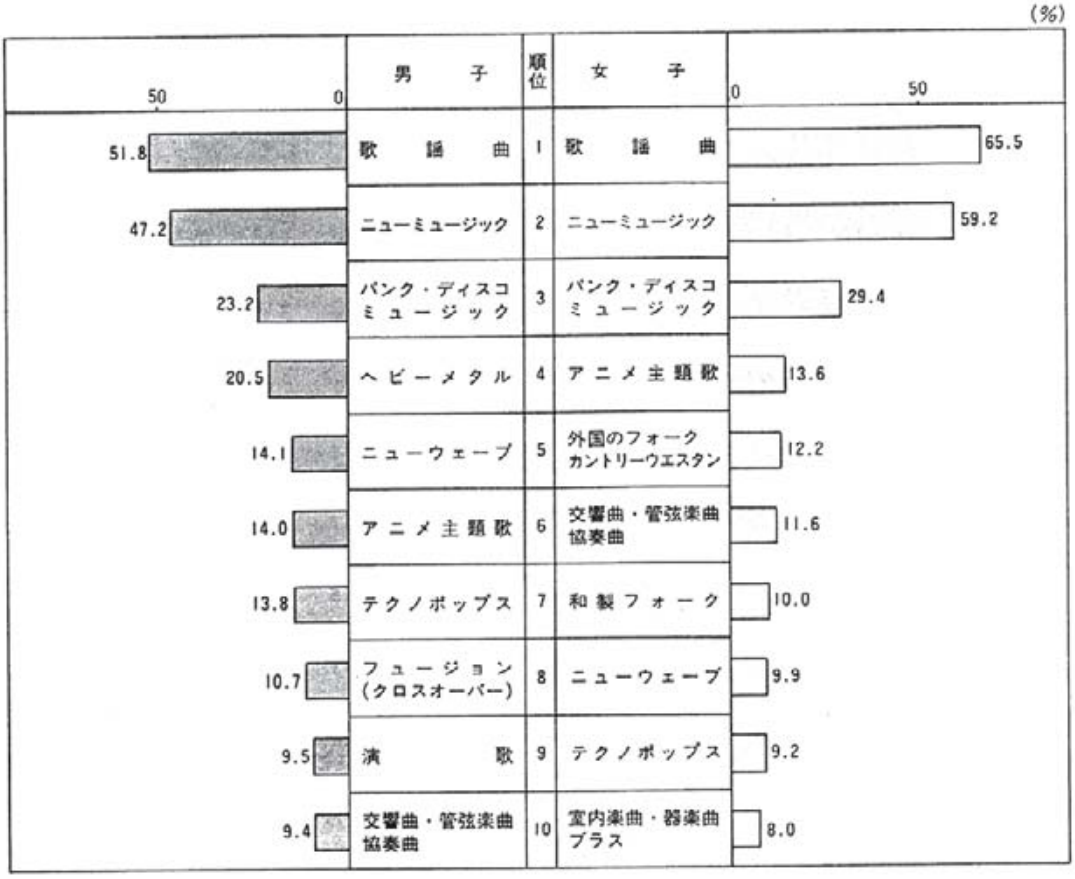
◯＝特に大きい値
～～＝特に小さい値

まれる音楽は、「ニューウェーブ」「交響曲・管弦楽曲・協奏曲」「フュージョン」である。また、特に「就職希望」者に多いのは、「パンク・ディスコミュージック」である。

---

ここでロック・ポップス系の音楽について若干の説明をしておきたい。パンクは、メロディーがあまりなく、強いリズムで、反社会的な歌詞が特徴である。日本のグループでは「アナーキー」が代表的。ヘビーメタルは、ギターなどにかなりのテクニックが要求され、重たい音、8または16ビートの速いテンポが特徴。「アースシェーカー」などが日本の代表グループ。質問紙の選択肢に欠けているが、ハードロックは、ヘビーメタルよりもメロディーラインが重視される。ニューウェーブは、もともとアーチストのファッションの傾向から命名されたもので、ポップなロックである。「デュランデュラン」、「カルチャークラブ」、「カジャグーグー」などが日本でもヒットしている。テクノポップスは、「イエローマジックオーケストラ」の音楽で代表されるように、コンピューターを駆使した音楽である。フュージョンとは、もともと、ロックとジャズの混合という意味である。日本では、「カシオペア」、「スクエア」などが代表的。

図Ⅲ－4　好きな音楽×性別




従来の多くの調査では、パンクもニューウェーブも、ロックという一つの範疇に含められていたが、今回の調査で微妙な嗜好の傾向が明らかになったと思う。

それでは音楽高感度人間はどんな音楽を好むのであろう。**表Ⅲ－5**はそれを示したものである。分析の結果を見ると、音楽高感度人間に支持されるのは、「パンク・ディスコミュージック」「ヘビーメタル」「ニューウェーブ」「テクノポップス」「フュージョン」である。いわば、欧米がルーツの最新流行音楽である。ここで注目したいのは、成績下位者に人気のあるパンクも、成績上位者に好まれるニューウェーブ、フュージョンのいずれもが好きな音楽としてあげられていることである。これに対して、「アニメ主題歌」と「交響曲・管弦楽曲・協奏曲」は音楽感度が低い者によく好まれている。これらの音楽は、ポップスのヒットチャートに関係なく、ミュージックビデオもほとんどないという事情が背景にあると思われる。「歌謡曲」も音楽高感度人間には人気がないようだ。

表Ⅲ－5　好きな音楽×音楽感度

(%)

| 好きな音楽 ＼ 音楽感度（高い ← → 低い） | I | | II | | III | | IV |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 歌謡曲 | 40.3 | < | 57.4 | < | (67.8) | | 60.0 |
| ニューミュージック | 52.2 | | (55.9) | | (55.9) | > | 39.4 |
| パンク・ディスコミュージック | (42.9) | > | 29.9 | > | 19.4 | > | 8.7 |
| ヘビーメタル | (28.1) | > | 18.4 | > | 8.3 | | 7.3 |
| アニメ主題歌 | 3.2 | < | 10.7 | < | 16.1 | < | (27.4) |
| ニューウェーブ | (24.3) | > | 15.1 | > | 6.7 | | 4.0 |
| テクノポップス | (18.2) | > | 14.2 | > | 10.1 | > | 4.7 |
| 交響曲・管弦楽曲・協奏曲 | 5.7 | < | 8.9 | < | 12.6 | | (13.9) |
| 外国のフォーク・カントリーウエスタン | 6.5 | < | 11.5 | | (12.4) | > | 8.7 |
| フュージョン(クロスオーバー) | (15.8) | > | 8.4 | | 8.6 | > | 4.0 |

◯＝最高値

# 4. 音楽行動のパターン

表Ⅲ－6は、「コンサートに出かける」「レコードを借りる」「リクエストを出す」などの音楽行動と属性の相関を見たものである。表の数値は、それぞれの項目について、この1年間「ぜんぜんしない」という回答の比率である。全体を見て、「貸しレコード屋でレコードを借り」た者が特に多いのがわかる。

男女別で有意な差が出たのは、「貸しレコード屋でレコードを借りる」「公開放送に行く」で、いずれも、男子の方にその行動回数が多い。

都市と地方で有意差が見られるのは、さもありなんと思われる「ディスコに出かける」頻度である。この1年間、1度もディスコに行かなかったのは、都会で85%、地方で98%である。

学年別に見ると、「ライブハウスに出かける」のも「ディスコに出かける」のも「レコードを借りる」のも、学年が上がるにつれ頻度が高くなる。しかし「ラジオ、テレビにリクエストを出す」のはその逆で、3年生になるとあまりやらなくなるようである。

進学校と非進学校とを比較すると、進学校において、「クラシックのコンサートやリサイタルに出かける」こと、「レコードを借りる」頻度が高い。「レコードを借りる」頻度

は、特に進学校の成績下位者に多い。進学校非進学校いかんによらず、成績下位者の方に行動回数が多いのは、ディスコに出かけることである。

進路希望別に見ると、「クラシックのコンサート」などに出かける回数が特に高いのは、「国立4年制大学希望」で、逆に低いのは「就職希望」である。レコードを借りる回数が最も高いのは、「私立4年制大学希望」である。

図Ⅲ－5は、音楽感度との相関を示したものである。「クラシックのコンサート」に出かける頻度以外は、すべて音楽感度の高い順に、行動の頻度が高くなっている。特に、「レコードを借りる」頻度の差は大きく、音楽高感度人間の7割近くが、この1年間に1回はレコードを借りている。これに対し、低感度の者は、7割以上がぜんぜん借りていない。さらに詳しく頻度を見ると、音楽高感度の者

表Ⅲ－6　音楽行動×属性（この1年間「ぜんぜんない」の割合）

(%)

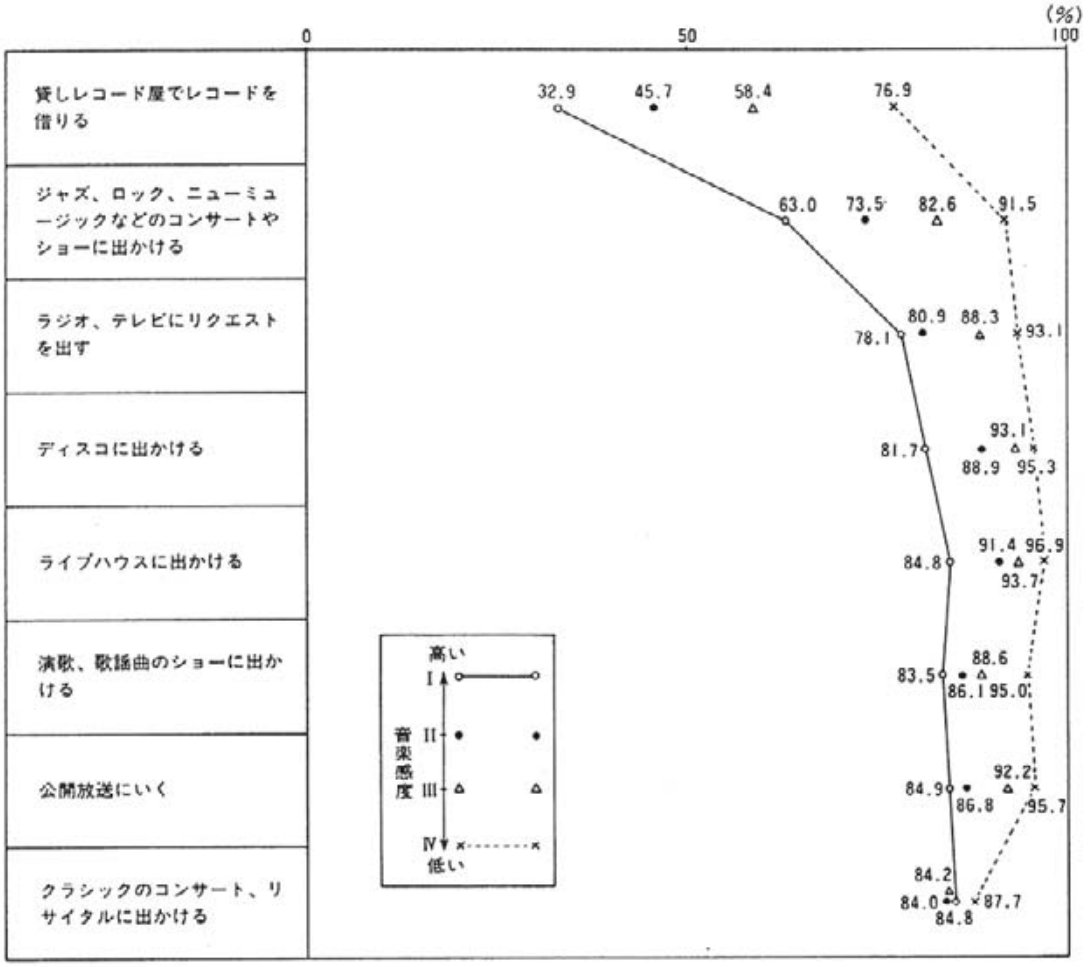
| 属性＼項目 | | | クラシックのコンサートやリサイタルに出かける | 演歌・歌謡曲のショーに出かける | ジャズ・ロック・ニューミュージックなどのコンサートやショーに出かける | ライブハウスに出かける | ディスコに出かける | 貸しレコード屋でレコードを借りる | 公開放送にいく | ラジオ、テレビにリクエストを出す |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 全体 | | | 85.0 | 88.0 | 77.4 | 91.7 | 89.8 | 52.7 | 89.7 | 84.9 |
| 学年 | 1年 | | 87.3 | 89.8 | 79.8 | 93.4 | 94.4 | 60.7 | 89.0 | 82.4 |
| | 2年 | | 84.1 | 86.1 | 75.6 | 93.3 | 89.3 | 46.3 | 90.9 | 84.5 |
| | 3年 | | 81.3 | 88.5 | 75.8 | 83.5 | 79.7 | 49.0 | 88.8 | 92.0 |
| 学校タイプ×成績 | 進学校 | 上・中の上 | 76.8 | 88.8 | 70.9 | 93.2 | 95.7 | 46.6 | 92.8 | 85.0 |
| | | 中の下・下 | 78.6 | 86.0 | 68.4 | 92.2 | 86.4 | 39.2 | 94.2 | 91.2 |
| | 非進学校 | 上・中の上 | 90.6 | 90.9 | 80.1 | 93.0 | 93.5 | 56.6 | 88.9 | 86.5 |
| | | 中の下・下 | 89.8 | 86.9 | 80.1 | 88.9 | 84.3 | 53.6 | 85.0 | 81.5 |
| 進路希望 | 就職 | | 90.3 | 85.5 | 81.0 | 91.0 | 85.7 | 55.9 | 86.4 | 83.7 |
| | 各種学校・専門学校 | | 86.7 | 88.2 | 79.6 | 89.4 | 87.6 | 58.0 | 90.8 | 83.8 |
| | 短期大学 | | 80.2 | 85.3 | 82.1 | 94.8 | 88.7 | 57.1 | 92.5 | 84.0 |
| | 私立4年制大学 | | 85.3 | 90.1 | 75.4 | 92.5 | 89.8 | 44.9 | 92.2 | 86.8 |
| | 国立4年制大学 | | 78.2 | 91.0 | 72.0 | 93.5 | 96.2 | 47.4 | 92.2 | 85.7 |

は3割以上が、年11回以上、レコードを借りているのに対し、低感度のその割合は4％である。おそらくこのような音楽高感度人間は、貸しレコード屋の常連になっているのであろう。

さらに成績上位者より下位者に頻度の高かった「ディスコへ出かける」ことについても、高感度の方が頻度が高い。ちなみに、レコードを借りる回数は進学校の生徒の方が多かった。

いずれにせよ、音楽感度が高ければ高いほど、（本章2で見たような意味で）音楽とのかかわりあいが深いだけでなく、実際にコンサートに足を運ぶなど、活発に行動しているようである。

図Ⅲ－5　音楽行動×音楽感度（この1年間「ぜんぜんない」の割合）



# 5. 音楽高感度人間

最後に、音楽高感度人間とはどんな高校生なのか、そのイメージ像を探ってみよう。

今まで、各節において、その一側面を明らかにしてきた。音楽テープを自分で編集し、ポップスのヒットチャートへの関心が高く、ミュージックビデオもよく見、音質にうるさい。楽器の演奏もうまく、作詞や作曲もする。好きな音楽のジャンルは、最新流行音楽で、頻繁に貸しレコード屋に通い、ポップス系のコンサートにも出かけ、ディスコにも行く。このような音楽高感度人間は、3や4で指摘しておいたように、成績の上下や学校タイプとはあまり相関がなさそうであった。

表Ⅲ－7を見ると、そのことがよくわかる。中学時代の成績が「上」の者が、感度の高い者の中に若干多いようではあるが、他に有意な差は見られない。都市と地方でも差が見られない。進路希望別では、「短大希望」者に感度の「やや低い」者が集まっているが、これは、男女差の反映であろう。

男女別にみると、音楽高感度人間は男子に多く、女子の音楽感度は「やや低い」という傾向がある。これは、音楽感度変数が、「おけいこごとをしている」ことと、負の相関関係にあることに関係しているのであろう。また、中野収は『自己表現のメディアとして音楽を選ぶのは男に多く、女性は文字と映像を選ぶ』（「自己表現としての音楽」ジュリスト総合特集『青少年－生活と行動』）と指摘しているが、そのことも関係しているのであろうか。

「あなたが最近買ったレコード（テープ）が発売されているのを何を通して知りましたか」という質問に対する回答を音楽感度別に見ると、音楽感度が高いほど、「新聞、雑誌、本」からレコード情報を入手している比率が高いことがわかる（順に、Ⅰ40%、Ⅱ32%、Ⅲ26%、Ⅳ16%）。音楽雑誌などでは、かなり先のレコード発売予定なども報道されているし、海外の最新ヒットチャートも載っている。音楽高感度人間は、行き当たりばったりで、レコード店に行くのではなく、常に音楽の最新情報を求めてレーダーを働かせているようである。

生活時間との相関を見てみよう（表Ⅶ－2、66ページ参照）の項目の中で、それぞれにかける時間の長さと音楽感度の相関がなかったのは、「家での勉強」「テレビを見る」「マンガを読む」「本を読む」「家の手伝い」である。一方で、感度が高ければ高いほど「週刊誌、雑誌を読む」時間、「外出」時間、「電話をかける」時間が長い傾向がある。逆に「ラジオをきく」時間は、感度が高いほど短くなっている。ラジオより、レコードやテープで音楽を聴いているのであろうか。雑誌などで音楽情報を敏感にキャッチしながら、電話で友達と話をし、ショッピングや遊びに外出する、そういう活発な高校生のイメージが浮かび上がる。

今回の質問紙調査では、自己イメージや、学校適応度に関する質問項目が欠けていたため、これ以上のことは言えないが、学校生活の中でも、校外生活においても、高校生にとって音楽が非常に重要なものであるのは確かであるから、音楽高感度人間が、学校の内外でうまく適応して生活しているであろうことが想像される。しかも、音楽高感度人間は、成績、学校タイプいかんにかかわらず等しく存在している。見方を変えれば、万一、学業成績不振等で、学校不適応を起こしても、音楽高感度人間の場合は、それを相殺するだけのものを音楽に見いだすことができると言えるのかもしれない。この辺の解明は、またの機会に譲ることにしたい。

## 表Ⅲ－7　音楽感度×属性

(%)

| 属性 ＼ 音楽感度 | | Ⅰ 高い | Ⅱ やや高い | Ⅲ やや低い | Ⅳ 低い |
|---|---|---|---|---|---|
| 全体 | | 22.8 | 27.6 | 30.1 | 19.5 |
| 性別 | 男子 | 26.0 ∨ | 28.1 | 26.3 ∧ | 19.6 |
| | 女子 | 17.7 | 26.7 | 36.2 | 19.5 |
| 学校タイプ | 都市進学校 | 22.6 | 29.4 | 30.6 | 17.4 |
| | 都市非進学校 | 21.4 | 27.1 | 32.1 | 19.4 |
| | 都市工業高校 | 25.3 | 30.5 | 27.8 | 16.4 |
| | 地方進学校 | 23.7 | 25.6 | 28.6 | 22.1 |
| | 地方非進学校 | 21.0 | 25.5 | 31.2 | 22.3 |
| 中学時の成績 | 上 | (30.3) | 27.3 | 23.9 | 18.5 |
| | 中の上 | 22.8 | 25.3 | 32.0 | 20.0 |
| | 中 | 21.2 | 28.9 | 32.9 | 17.0 |
| | 中の下 | 19.1 | 29.7 | 31.0 | 20.2 |
| | 下 | 23.4 | 27.4 | 27.7 | 21.5 |
| 進路希望 | 就職 | 22.4 | 29.6 | 30.0 | 18.2 |
| | 各種学校・専修学校 | 22.1 | 30.7 | 30.4 | 16.8 |
| | 短期大学 | 16.9 | 22.1 | (41.3) | 19.7 |
| | 私立4年制大学 | 26.6 | 29.0 | 26.0 | 18.3 |
| | 国立4年制大学 | 23.2 | 25.5 | 28.9 | 22.4 |

◯＝最大値

# 第IV章 高校生と友人間情報

高校生の学校生活に関する近年の調査は、概して授業・勉強や先生に楽しさを得るよりも、友人との交遊や語らいに楽しさを求めていることが明らかにされている。学校生活のかなりの部分の時間は授業が占めているのであるから、考えてみれば近年の傾向は本末転倒の学校生活観と言えなくもない。

しかし、情報や知識の流れという観点に立つと、授業や先生とのフォーマルな関係におけるよりも、生徒同士の友人間における情報交換の過程の方が、はるかに多面的でニーズに即応的である。しかも今後ますます高校生にかかわる情報量が増大するとともに、情報のネットワークが変化をすれば、当然生徒の個人生活や学校生活も影響を受けざるをえない。

本章では、このような変化の徴候を友人間の話題を中心にすえて見ていきたい。

# 1．情報としての話題

## (1)学校での友人との話題

友人との会話は、生徒が学校生活の中で楽しく、最も生き生きとする部分であるが故に、おそらく高校生の抱く関心やニーズを反映した情報の種類や性質がつかめるのではないかと思われる。

学校で普段、なにげなく交わしている会話の話題にはどのようなものがあるのであろうか。まず図Ⅳ－1は、友だちと話題になりそうな18項目のテーマについて、「よくある」と答えた回答の単純集計をとり出して、図示したものである。話題としては、①見たテレビのことが60％で最も多く、②音楽のこと（48％）がそれに次いでいる。以下③異性のこと、④映画のこと、⑤タレントや歌手のこととなり、18項目中で上位5項目は「異性のこと」を除けばいずれもマス・メディアにのった情報にかかわっていることがわかる。

多感な青年期にある高校生が「異性のこと」に関心や話題を向けることはごく自然なことであるとしても、学業生活に直接かかわる「勉強や受験の話」、「読んだ本の内容」、「先生が授業中にしゃべったこと」などは、話題になりにくいようで、きわめて低い数値の回答結果である。これは遊び志向で、しかもマス・メディア情報優位の現在の高校生の一般的な生活状況を、かなり端的に示していると見てよさそうである。

## (2)話題と情報環境

とは言え高校生にどのような話題が好まれ、また選びとられているかは、生徒が送る学校生活の雰囲気にも相当程度規定されてくると思われる。そうした意味で友だちとの話題と学校タイプ別のクロス集計をとってみたが、有意な差のある項目は図Ⅳ－2に示した通りである。

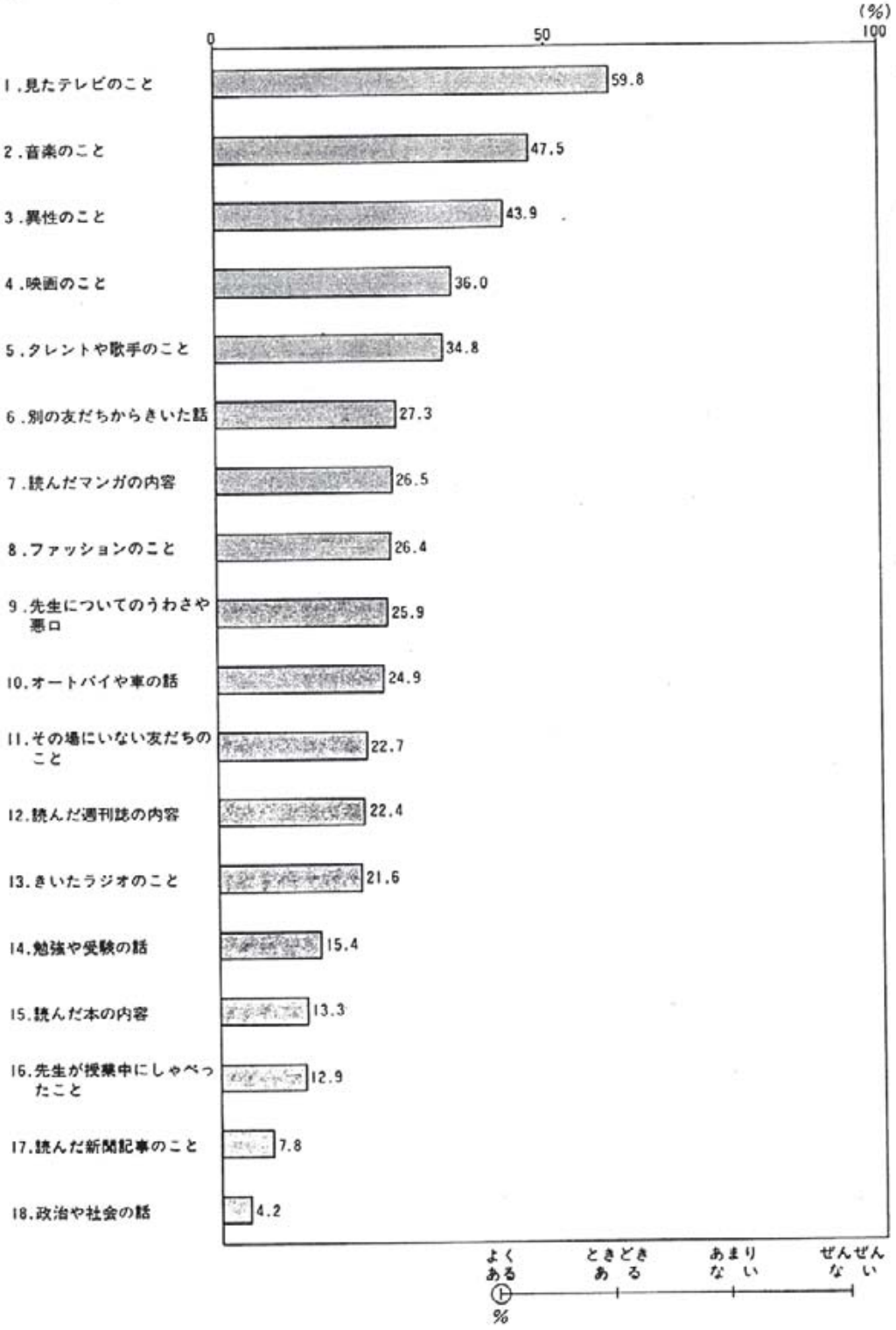
都市や地方を問わず進学校ほど当然のことながら、学業生活に密着した話題が多く、例えば「勉強や受験の話」は都市進学校77％、地方進学校75％＞地方非進学校45％、都市非進学校40％＞都市工業高校28％とはっきりとした差が出ている。同様なことは、「先生が授業中にしゃべったこと」についても言える。

しかし、生徒の話題の中でも「きいたラジオのこと」、「オートバイや車の話」などについては、都市と地方の地域差が見られる。地方の高校生ほどラジオ聴取内容が話題になることが多い（地方非進学校・進学校共に71％＞都市進学校57％、非進学校55％、工業高校54％）。また逆に「オートバイや車の話」になると、都市の非進学校・工業高校ほど顕著に高く、地方の進学校ほど低いパターンが見られる（都市工業高校81％＞都市非進学校64％＞都市進学校41％＞地方非進学校36％＞地方進学校23％）。

こうした話題の中身の違いは、言うならば生徒が置かれている情報環境の差異の影響を受けているように思われる。念のために、「勉強や受験の話」、「先生が授業中にしゃべったこと」、「読んだ新聞記事のこと」、「オートバイや車の話」の4項目について、生徒の学年別のクロスを表Ⅳ－1に掲げた。他の項目については、学年による差はそれほど大きくない。

表Ⅳ－1を、「よくある」、「ぜんぜんない」の両極に着目して見ると、学年進行とともに話題が高まるのは、「勉強や受験の話」（「よくある」1年6％＜2年19％＜3年29％）と「読んだ新聞記事のこと」（「よくある」1年5％＜2年9％＜3年13％）についてである。やはり3年生ともなると、受験に対する態度が友人との話題の中にもおのずと含まれてくる傾向を示している。また3年生は、車の免許取得が年齢的に可能になってくるため

図Ⅳ－1　友だちとの話題のテーマ

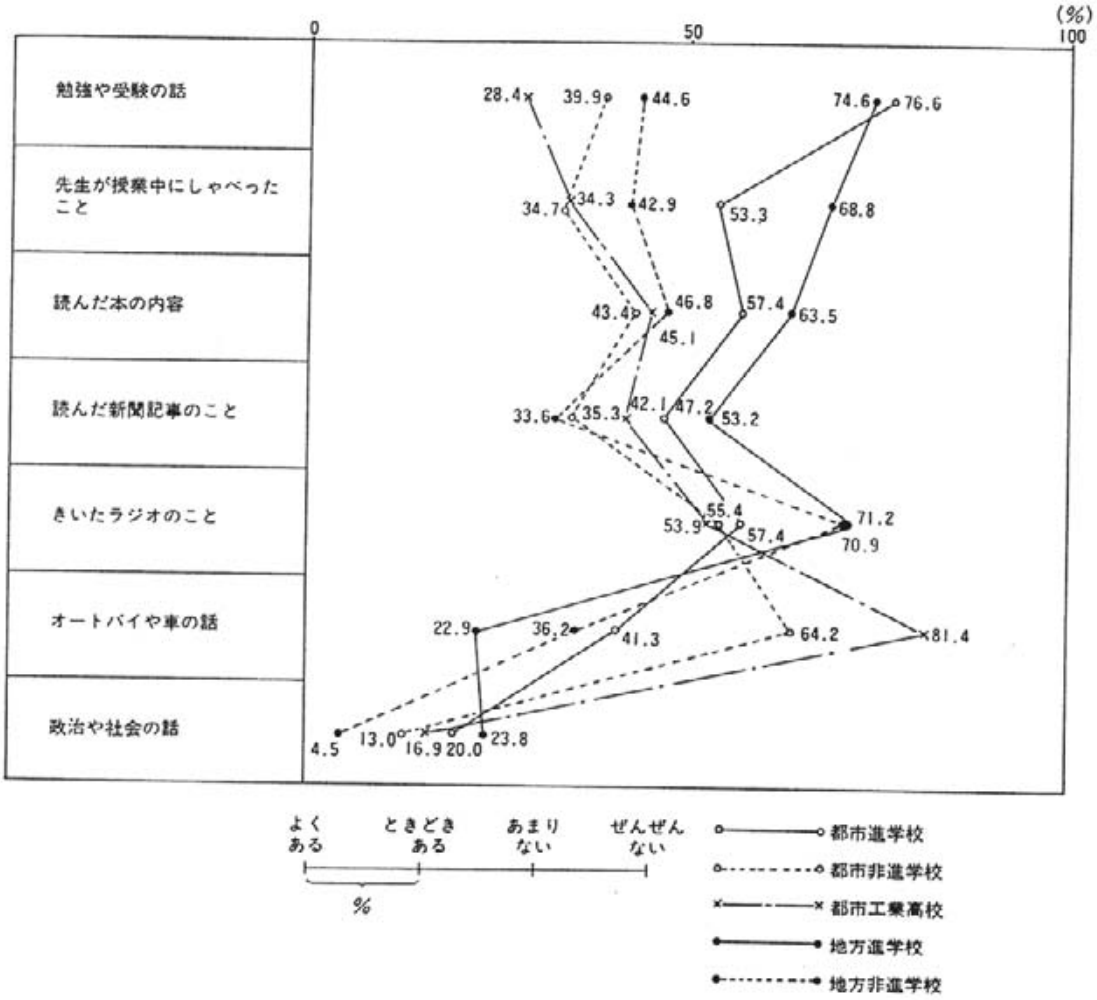


か、「オートバイや車の話題」についても急激に高まっている(35%)。

こうしてみると、高校生の友人間の話題には、年齢的な発達の違いはもちろん、学校や地域の属性傾向に少なからず影響を受けていることが指摘される。つまり情報化の進展度が高く、情報メディアも多様化している都市型高校生は、それに対応した生活スタイルを準備することになる。

限られた地域社会や学校社会においても、すでに情報が多面化してきていて、高校生といえどもそうした情報の流れの中で置き去られないだけの必要な情報に対する感覚や基礎知識を身につけておく必要がある。

図Ⅳ－2　友だちとの話題×学校タイプ



## 表Ⅳ－1　友だちとの話題×学年

(%)

| 項目 | 尺度 | よく | ときどき | あまり | ぜんぜん |
|---|---|---|---|---|---|
| | | ある | | ない | |
| 勉強や受験の話 | 全体 | 15.4 | 35.9 | 32.1 | 16.6 |
| | | 51.3 | | 48.7 | |
| | 1年 | 6.4 | 28.2 | 41.8 | 23.6 |
| | | 34.6 | | 65.4 | |
| | 2年 | 18.8 | 46.1 | 25.2 | 9.9 |
| | | 64.9 | | 35.1 | |
| | 3年 | 29.3 | 29.3 | 25.7 | 15.7 |
| | | 58.6 | | 41.4 | |
| 先生が授業中にしゃべったこと | 全体 | 12.9 | 33.0 | 37.9 | 16.2 |
| | | 45.9 | | 54.1 | |
| | 1年 | 9.8 | 28.5 | 40.7 | 21.0 |
| | | 38.3 | | 61.7 | |
| | 2年 | 16.9 | 37.3 | 34.6 | 11.2 |
| | | 54.2 | | 45.8 | |
| | 3年 | 10.7 | 33.1 | 39.4 | 16.8 |
| | | 43.8 | | 56.2 | |
| 読んだ新聞記事のこと | 全体 | 7.8 | 34.0 | 39.8 | 18.4 |
| | | 41.8 | | 58.2 | |
| | 1年 | 5.0 | 27.2 | 42.1 | 25.1 |
| | | 32.2 | | 67.8 | |
| | 2年 | 8.6 | 36.6 | 39.6 | 15.2 |
| | | 45.2 | | 54.8 | |
| | 3年 | 12.9 | 44.2 | 33.0 | 9.9 |
| | | 57.1 | | 42.9 | |
| オートバイや車の話 | 全体 | 24.9 | 25.9 | 25.8 | 23.4 |
| | | 50.8 | | 49.2 | |
| | 1年 | 28.0 | 25.6 | 24.6 | 21.8 |
| | | 53.6 | | 46.4 | |
| | 2年 | 17.8 | 23.5 | 28.9 | 29.8 |
| | | 41.3 | | 58.7 | |
| | 3年 | 35.1 | 32.6 | 21.3 | 11.0 |
| | | 67.7 | | 32.3 | |

◯＝「よくある」の最大値
――＝「ぜんぜんない」の最大値

## 2. 話題の中心になれる情報感覚

社会の情報化が進めば進むほど、いろいろな情報を、自分に一番的確な情報としてキャッチしながら、しかも高校生であれば友人間のコミュニケーションに参画していく意識が求められてくる。

### (1)「話題の中心」になれる事柄

図Ⅳ－3は、クラスの中で「話題の中心」になれそうな事柄を尋ねたものだが、全体として、友だちとの話題のテーマ（図Ⅳ－1）で見たのと同様に、マス・メディアを通じた情報が話題の材料になっている。しかも高校生としてとび抜けた話題はなく、どちらかというと生徒自身が「話題の中心」になれそうな部分が分散化している傾向が特徴的である。

それでも高校生としては、テレビや音楽などの情報そして人気タレントの情報は、日頃から流行や変化に気をつけて最新情報を仕入れておかなければ、話の輪に入っていけないようである。それに比べてまじめで硬派な、「勉強や受験」、「文学や小説」、「政治や社会」などの話は敬遠されている。

### (2)「話題の中心」になれる事柄と学業成績

ところで高校生のこうした傾向は、学業成績の良し悪しとどのように関連しているのであろうか。話題の中心になれる事柄と学業成績とのクロス結果を示した表Ⅳ－2によると、テレビや歌謡曲などの音楽情報については、成績に関係なく、全体として、「話題の中心」になれそうと生徒には思われている。

とはいえ、過半数に達するこれといえる絶対的な話題は、せいぜい「テレビの話」程度（上53%、中57%、下52%）である。表Ⅳ－2を大づかみにまとめると、成績の良い者は、当然のことながら勉強や受験の話には自信が持て（上31%＞中16%＞下12%）、スポーツの話題も比較的リードできる。しかし、異性の話題や人気タレントのことになると、学業成績がそれほど優秀でない生徒の方が得意な話題になるようである。

かつてはどの教室にも、例えば早耳でいちはやく先生や友だちのうわさを集めてきたり、なるほどと思わせるニックネームをつけ回ったりする、クラスの人気者とか話題の提供者となったりする生徒がいたものである。しかし、生徒間の話題が分散化し、自信を持って「話題の中心」に参画できそうな事柄が、せいぜいブラウン管情報になってくると、画一的なマス・メディア情報に依存する傾向はますます強まってくる。もはやかつてのようなクラスのパーソナルなレベルでの情報通といった人気者は姿を消していく。

### (3)求められる情報感覚

それでは、高校教育の中にもパソコンやワープロが導入され始めたいま、こうした情報技術革新に対応して、本質的な意味で情報環境の変化にどのようなかかわり方が求められてくるのであろうか。

むろんマイコン時代だからといって、高校生がすべて情報機器に熟練しなければならないと考える必要はない。むしろ資料や情報が瞬時に電子ファイルされたり、電子的に情報が伝達されるような社会生活やシステムの変化とスピードに対処できる思考方法や行動様式が大切なのだと思う。その意味で、話題の中心に参画できる情報処理能力のセンスが問われるわけである。

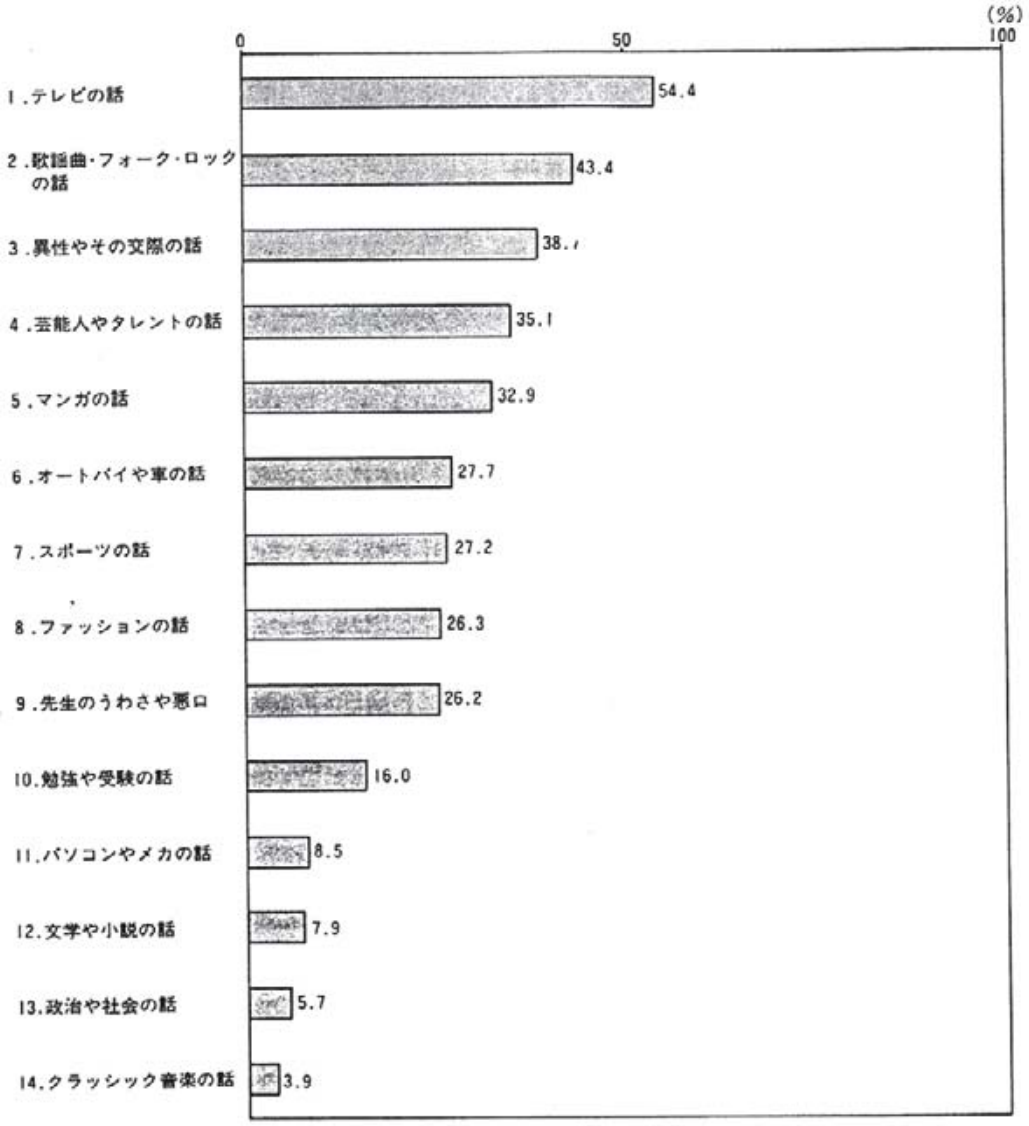
そこで、実際に、高校生のいろいろな話題の中心になれるタイプは、どのようなセンスが関連しているのかを探るために、「話題の中心」に関して有意差のある7つの共通項目と活字情報との接触量の多少、音楽感度の高

低とのクロス集計をとった。なお、活字情報についての指標としては、1か月の雑誌や週刊誌（マンガは除く）との接触量を、また音楽感度については、音楽を聴くときの音質に対する敏感さをとりあげた。

結果は、図Ⅳ－4、図Ⅳ－5に示した通りである。要約すれば、まず第一に、活字情報が多く、また音楽感度が高い生徒ほど、すべての面で話題の中心になれる自信を示している。その上で、第二に、活字情報の多いタイプよりも、さらに音楽感度の高い生徒の方が、話題づくりへの参画意識は高い。第三に、その反面、音楽感度の低いタイプの生徒は、話題に対応するセンスがすべての面で最も鈍い、という結果である。

つまり、さらに要約していえば、音の変化

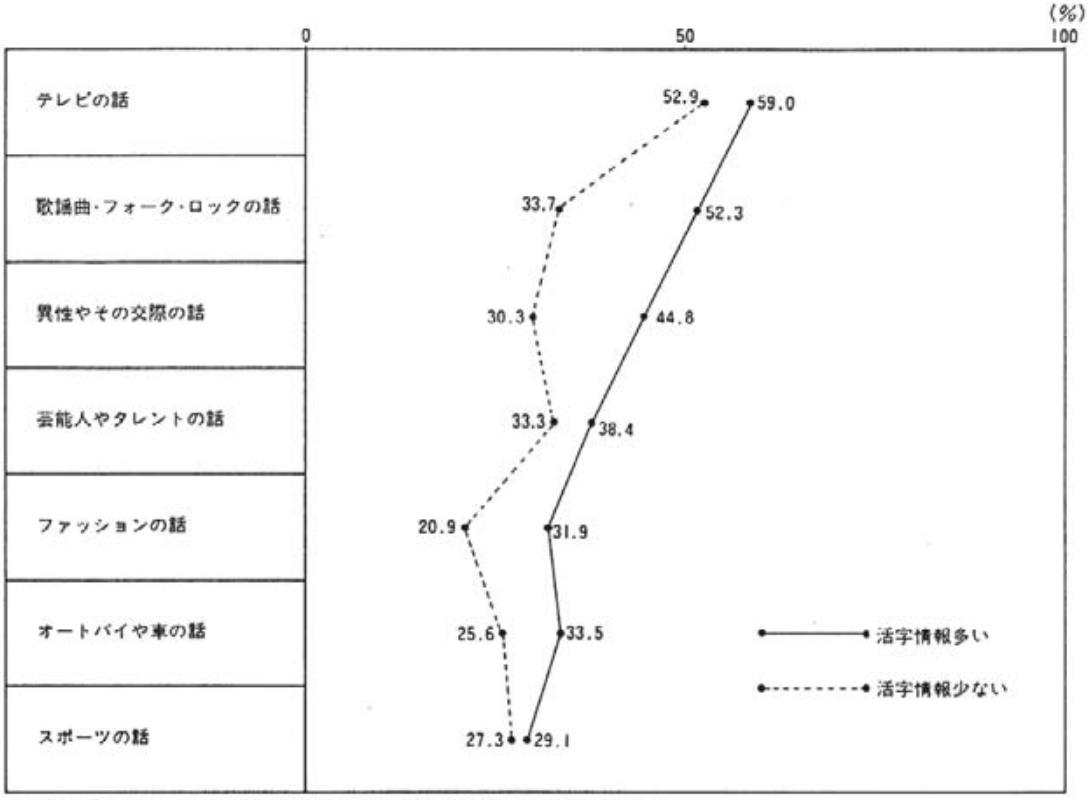
図Ⅳ－3　クラスの中で「話題の中心」になれるもの



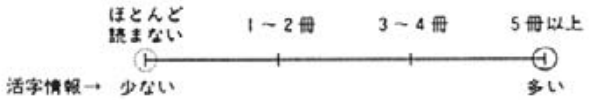
## 表Ⅳ－2　「話題の中心」になれる×学業成績

| | | 0～19% | 20～29% | 30～39% | 40～49% | 50%以上 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 学業成績 | 上 | パソコン・メカ(13%)<br>政治や社会　(12%)<br>文　学　(11%)<br>クラッシック(5%) | 芸能・タレント(29%)<br>先　生　(27%)<br>ファッション(20%) | スポーツ　(37%)<br>異　性　(36%)<br>マンガ　(31%)<br>勉強・受験　(31%)<br>オートバイ・車(31%) | 歌謡曲など　(44%) | テレビの話　(53%) |
| | 中 | 勉強・受験　(16%)<br>パソコン・メカ(8%)<br>文　学　(7%)<br>政治や社会　(4%)<br>クラッシック(3%) | ファッション(28%)<br>オートバイ・車(26%)<br>スポーツ　(26%)<br>先　生　(23%) | マンガ　(34%) | 歌謡曲など　(44%)<br>異　性　(41%)<br>芸能・タレント(40%) | テレビの話　(57%) |
| | 下 | 勉強・受験　(12%)<br>パソコン・メカ(9%)<br>文　学　(6%)<br>政治や社会　(6%)<br>クラッシック(5%) | ファッション(27%)<br>スポーツ　(23%) | オートバイ・車(34%)<br>芸能・タレント(32%)<br>先　生　(30%)<br>マンガ　(30%) | 歌謡曲など　(41%)<br>異　性　(40%) | テレビの話　(52%) |

## 図Ⅳ－4　「話題の中心」になれる×活字情報



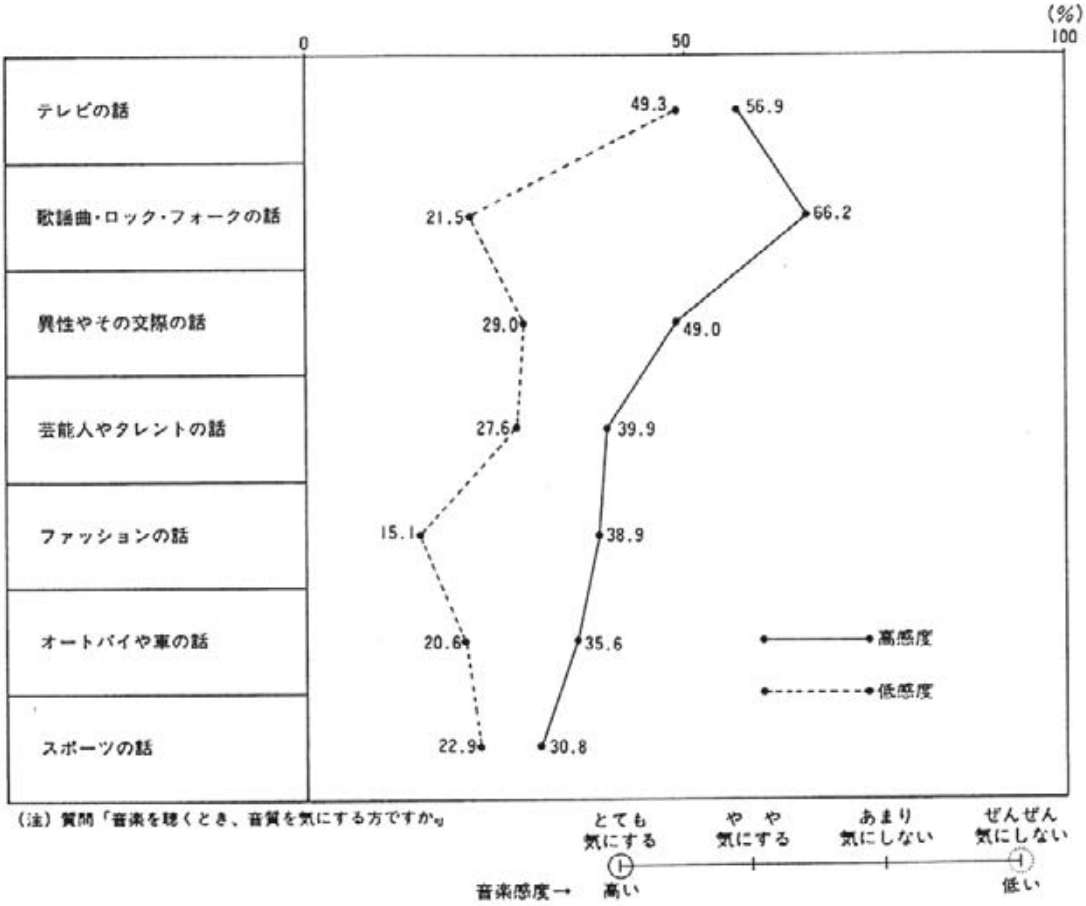

(注) 質問「あなたは、雑誌や週刊誌(マンガ誌を除く)を月に何冊くらい読みますか。」



に敏感に反応できる、言うならば感覚型の生徒ほど、多様な話題や情報に的確に対処しうる能力を示しているという見方である。少なくともこれまでの結果からは、情報を活字を通して入手するタイプよりは、どちらかというと全身感覚で周囲の情報を適切に読みとり、目的に向って的確に行動を組み立てられるような資質が、イメージとしてとらえられている。

したがって、今後ますます社会が高度化すれば、高校教育においても、必要とされるこうした基本的資質を習練していくことが強く要請されよう。

**図Ⅳ－5　「話題の中心」になれる×音楽感度**




（注）質問「音楽を聴くとき、音質を気にする方ですか。」

# 第Ⅴ章 高校生が求める情報

高校生はさまざまな顔を持っている。その一つに音や電子に強く、その種の情報には敏感に反応する姿がある。音楽テープをいとも簡単に編集し直したり、マイコンでテレビゲームを作る高校生を見ると、まさに情報社会の"申し子"と言える。

これまでは、ややもすれば彼らの暗い姿が浮き彫りにされたきらいはある。確かに体力が弱いとか、自立が遅いとか、明るい未来像を描けない高校生が多いという事実はある。しかし、現在の高校生を見てみるともう一つの分析視角が必要である。彼らを病理的な側面からだけでなく、激しい社会の動きに適応し、新しい時代を先どりしているか、という視点からもとらえなければならない。

それでは、情報社会の申し子たる高校生の情報環境はどうなっているのだろうか。モノグラフ・高校生 '82（vol.5「高校生の校外生活と価値観」）によると、レコード（カセット）は1人平均35枚と多く、音楽は生活に欠かせないものとなっている。

また、蔵書数は1人平均65冊で、文庫本24冊、マンガ単行本22冊、文芸書8冊、学習参考書11冊となっている。そして、本・雑誌を1か月平均して9冊読んでいる。それから、これは本調査のデータであるが3割弱が自分専用のテレビを持っている。

これらからでもわかるように、彼らは自分の身近に多種類の情報メディアを持っている。それこそ彼らは、さまざまな情報環境の中にいる。したがって、本章ではそのような状況の下で、高校生が本当に必要としている情報メディアと情報は何であるか、を明らかにしようとしている。

# 1．なくなっては困る情報メディア

これまでの章では、高校生の具体的な情報行動を浮き彫りにしてきた。そこから言えることは、音楽にせよ、マンガ、雑誌、それにテレビにせよ、それらが高校生の生活の中にしみこんでいる、という事実である。実際、友人との間で話題になるベスト３を見ると、「見たテレビのこと」（１位）、「音楽のこと」（２位）、「異性のこと」（３位）となっている。

それでは、それらのメディアは彼らにとって、どれぐらいの必要性があるのであろうか。今、小説や映画などを含めて９つのメディアをあげ、「もし、この世からそれらがなくなってしまったら、どれぐらい困りますか」、と尋ねた結果が表Ｖ－１である。

表から２つのことが読みとれる。１つは、高校生は映像、活字メディアにかかわらず多くのメディアを必要としていること。トップのテレビは言うまでもなく、教科書や小説という典型的な活字メディアでさえなくなると

表Ｖ－１　高校生が必要としている情報メディア－もしなくなったら－

(%)

| 尺度 / 項目 | とても困る | かなり困る | ほとんど困らない | ぜんぜん困らない |
|---|---|---|---|---|
| テレビ | 53.3 | 30.6 | 12.1 | 4.0 |
| | (83.9) | | | |
| レコード・テープ | 53.3 | 29.4 | 12.6 | 4.7 |
| | (82.7) | | | |
| 新聞 | 28.0 | 42.8 | 22.9 | 6.3 |
| | (70.8) | | | |
| ラジオ | 31.6 | 36.9 | 24.4 | 7.1 |
| | (68.5) | | | |
| 映画 | 31.1 | 32.5 | 26.1 | 10.3 |
| | 63.6 | | | |
| 週刊誌 雑誌(マンガを除く) | 30.2 | 33.0 | 26.4 | 10.4 |
| | 63.2 | | | |
| マンガ | 30.7 | 28.0 | 26.1 | 15.2 |
| | 58.7 | | | |
| 教科書 | 15.1 | 29.4 | 24.9 | 30.6 |
| | 44.5 | | | |
| 小説 | 15.7 | 22.2 | 34.6 | 27.5 |
| | 37.9 | | | |

困ると答える者が、4割弱もいる。

もう1つは、テレビ(84%)、レコード・テープ（83%）などのどちらかと言えば、新しいメディアに属するものを、とくに大切にしていることである。

ところで、こうした情報メディアを大切にする傾向は、彼らの音楽感度によってどのように変わるだろうか。図V－1に目を移してほしい。図中の実線は、音楽に高感度である者、そして破線は低感度の者の「困る」と答えた数値を示してある。

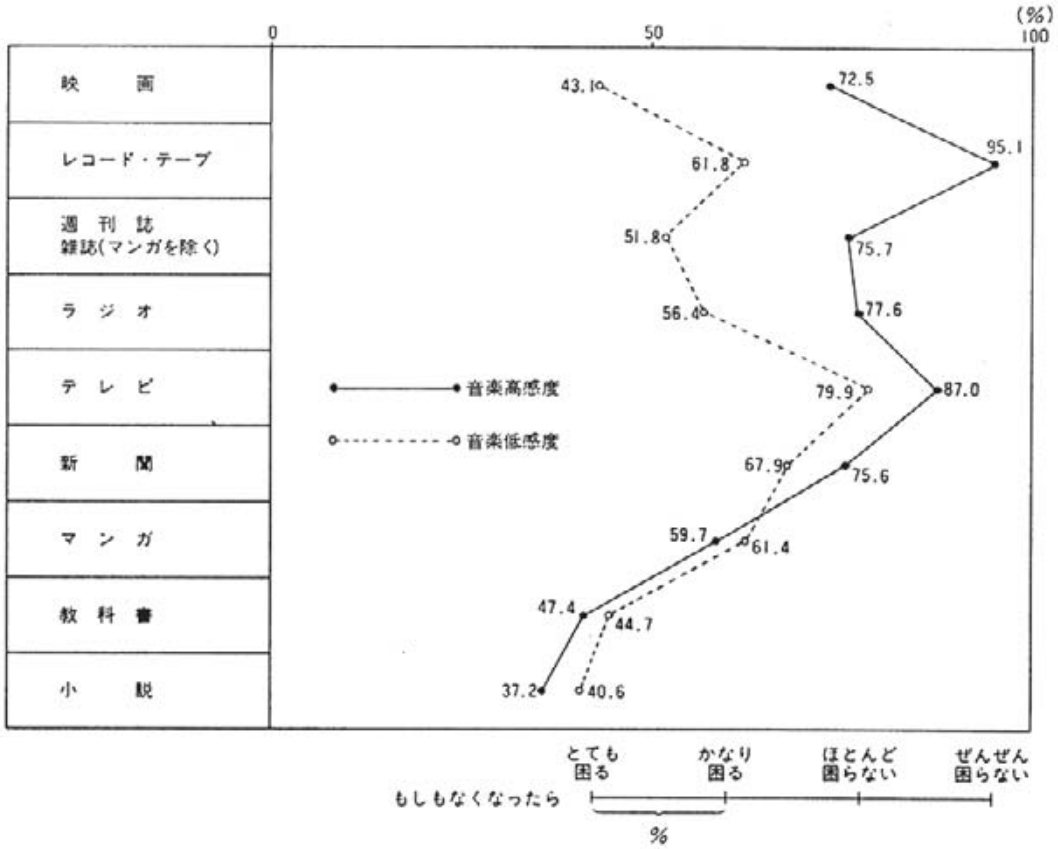
興味深い結果が読みとれる。総じて、音楽に対して高感度な者は、レコード・テープはもとより、映画、ラジオなど多くのメディアを必要としている。とりわけ、彼らが音楽とはそれほど結びつきがない(音楽雑誌を除き)週刊誌や雑誌をも必要としている事実は、注目に値する。

また、こうした別のメディアを必要とする傾向は、マンガを除いた雑誌の購読冊数においても見られる。図V－2。これは1か月に読む雑誌や週刊誌を冊数ごとに調べてある。図中の実線は1か月に5冊以上、破線は0冊の者の数値を示してある。

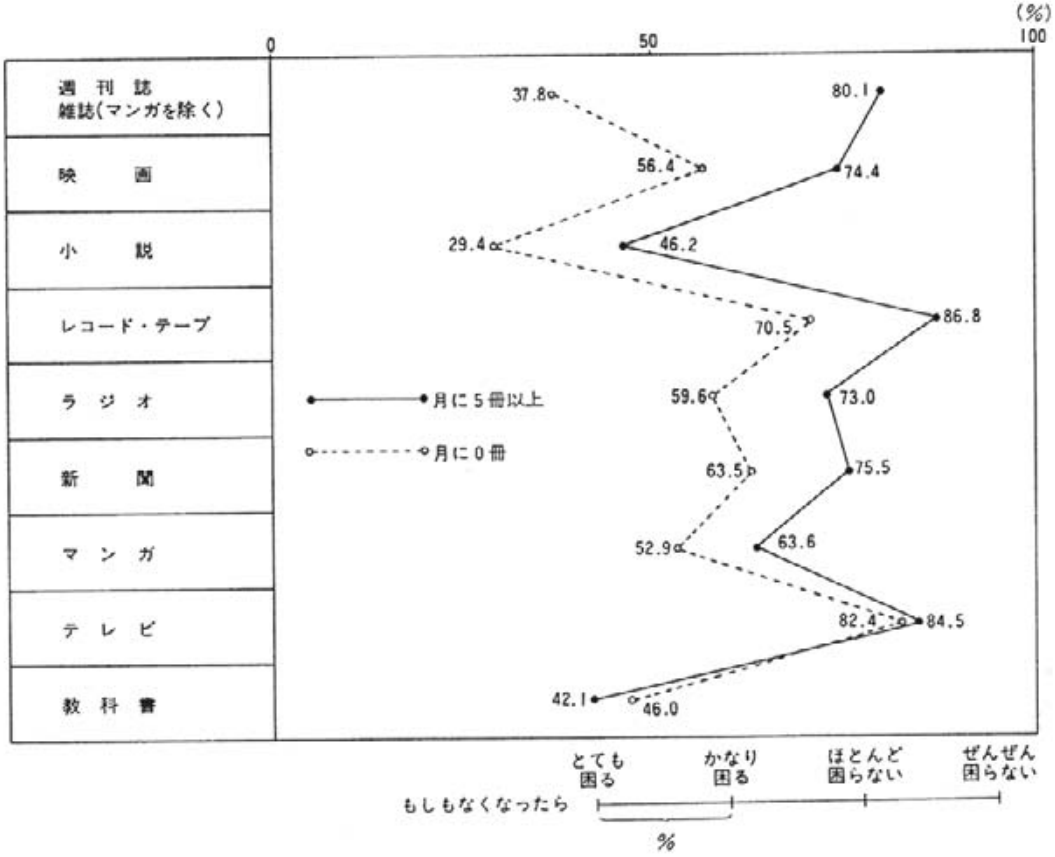
図からわかるように、1か月に5冊以上読んでいる者は、週刊誌・雑誌、そして小説、新聞などの活字メディアを必要とするだけでなく、映画やレコード・テープ、ラジオなどの映像や音声メディアまでも大切にしている。

こうしてみると、音楽に対して高感度の者

図V－1　高校生が必要としている情報メディア×音楽感度



図Ⅴ－2　高校生が必要としている情報メディア×雑誌購読冊数




や週刊誌や雑誌を多く読んでいる者は、一般的に、さまざまな情報メディアに興味を示している。第Ⅲ章で詳しく述べているように音楽高感度の者は、ポップスのヒットチャートに興味があり、ミュージック・ビデオをよく見たり、音楽テープを編集したりもする。そして音にもうるさい人たちである。また、週刊誌や雑誌を多く読む人は、活字を媒介とした情報に敏感な人たちである。したがって、音楽高感度な者と雑誌情報に敏感な者は、まさに情報社会の"申し子"と言える。

次に、学校のタイプによって情報メディアの必要性がどのように変化するか検討する。表Ⅴ－2に注目してほしい。表中の数値は「とても困る」と「かなり困る」を加えたものである。また数値の最も高いものには◯を、一番低いものには═══をつけて示している。

ここからも興味深い事実が読みとれる。1つは、教科書、小説、新聞などに見られるように、都市工業高校→都市非進学校→地方非進学校→都市進学校→地方進学校と数値が増えている。すなわち典型的な活字メディアは、進学校とりわけ地方進学校の者ほど大切にしているのである。

もう1つは、進学校－非進学校という軸で分析できない情報メディアがあるという事実である。例えば、マンガ、テレビ、レコード、それに週刊誌・雑誌などは、都市進学校が最も数値が高く、逆に地方進学校が一番低い。また、映画では、地方非進学校が最も高く、

表Ⅴ－2　高校生が必要としている情報メディア×学校タイプ(男子)

(%)

| | 教科書 | 小説 | 新聞 | マンガ | ラジオ | 週刊誌 雑誌 | テレビ | 映画 | レコード テープ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 地方進学校 | 70.6 | 59.8 | 84.5 | 48.3 | 66.4 | 62.9 | 79.5 | 66.4 | 77.6 |
| 都市進学校 | 47.8 | 46.9 | 81.2 | 63.8 | 71.9 | 73.2 | 87.5 | 63.2 | 85.7 |
| 地方非進学校 | 45.4 | 28.4 | 74.0 | 62.5 | 77.8 | 66.9 | 84.8 | 70.4 | 80.3 |
| 都市非進学校 | 33.3 | 25.6 | 67.5 | 61.6 | 73.0 | 64.2 | 86.5 | 66.5 | 82.7 |
| 都市工業高校 | 27.4 | 26.3 | 68.1 | 58.9 | 69.4 | 65.1 | 85.6 | 67.1 | 81.1 |

とても困る 1 ―― かなり困る 2 ―― ほとんど困らない 3 ―― ぜんぜん困らない 4

%

◯＝数値が最も高い
▬＝数値が一番低い

都市進学校が一番低い。すなわち、同じ進学校でも都市の高校生のほうが、映像、音メディア、そして雑誌情報を大切にしている。一方、地方の進学校は、典型的な活字メディアを欲している。

高校生を対象とした調査研究では、地域差がなくなっていることが指摘されてきた。ところが、データが示すように特定の情報メディアについてはまだ地域差が残っているようだ。

## 2. 高校生が欲する情報

高校生は多くの情報メディアが、この世の中からなくなると困ると答えていた。それでは、彼らはそれらのメディアを通して、どんな情報が送られてくることを望んでいるのであろうか。

表Ⅴ－3は、彼らが欲するであろう情報を16項目あげ、「とてもほしい」から「ほしくない」までの4段階スケールで答えてもらった結果である。表からわかるように、全体的に見て、高校生が強く欲している情報は少ない。今、もう少し具体的に見ると次のとおりである。

**○6割以上が求める情報**

「苦手な教科の成績をあげる勉強方法」……(75%)

「レコードやテープを安く手に入れる方法」……(64%)

**○4割以上が求める情報**

「高校生ができそうなアルバイトを紹介したもの」……(49%)

「高校生がとれそうな資格を紹介したもの」……(48%)

「進学したい大学の卒業生の就職先」……(41%)

**○2割以下しか求めない情報**

「進学したい大学の教授が研究しているテーマ」……(20%)

「政治のしくみをわかりやすく紹介したもの」……(19%)

「部活動と勉強を両立させた体験を紹介し

したもの」……(18%)

このままでは、彼らの欲する情報のかたまりが今一歩はっきりしない。そこで、それら16項目を因子分析にかけ、整理した結果が表V－4である。5つの因子が析出された。第1因子は、「進学したい大学の正確な偏差値」「進学したい大学の卒業生の就職先」「進学

表V－3　高校生のほしい情報

(%)

| 項目 ＼ 尺度 | とてもほしい | かなりほしい | すこしほしい | ほしくない |
|---|---|---|---|---|
| 1位　苦手な教科の成績をあげる方法 | 47.7 | 26.9 | 15.8 | 9.6 |
| | (74.6) | | | |
| 2位　レコードやテープを安く手に入れる方法 | 42.2 | 22.2 | 21.2 | 4.4 |
| | (64.6) | | | |
| 3位　高校生ができそうなアルバイトの紹介 | 26.1 | 22.5 | 27.4 | 24.0 |
| | (48.6) | | | |
| 4位　高校生がとれそうな資格の紹介 | 23.8 | 24.2 | 33.1 | 18.9 |
| | (48.0) | | | |
| 5位　大学の卒業生の就職先 | 19.7 | 21.0 | 21.6 | 37.7 |
| | (40.7) | | | |
| 6位　大学の正確な偏差値 | 17.6 | 19.1 | 26.3 | 37.1 |
| | 36.7 | | | |
| 7位　高校生にはやっている持ち物の紹介 | 10.9 | 16.8 | 35.5 | 36.8 |
| | 27.7 | | | |
| 8位　部活動のクラブが強くなる練習方法 | 15.2 | 12.3 | 18.2 | 54.3 |
| | 27.5 | | | |
| 9位　オートバイの中古を安く手に入れる方法 | 15.9 | 9.3 | 19.4 | 55.3 |
| | 25.2 | | | |
| 10位　異性からのもて方を紹介したもの | 13.4 | 11.6 | 33.6 | 41.4 |
| | 25.0 | | | |
| 11位　好きなタレントの生活の紹介 | 12.8 | 11.9 | 24.2 | 51.1 |
| | 24.7 | | | |
| 12位　減量の仕方を紹介したもの | 14.1 | 9.8 | 17.6 | 58.5 |
| | 23.9 | | | |
| 13位　片想いの異性へのプロポーズの仕方 | 13.0 | 10.2 | 29.5 | 47.3 |
| | 23.2 | | | |
| 14位　大学の教授の研究しているテーマ | 8.6 | 11.0 | 25.5 | 54.9 |
| | 19.6 | | | |
| 15位　政治のしくみを紹介したもの | 8.3 | 10.5 | 28.7 | 52.5 |
| | 18.8 | | | |
| 16位　部活動と勉強を両立させた体験 | 7.5 | 10.0 | 27.0 | 55.4 |
| | 17.5 | | | |

したい大学の教授の研究テーマ」、それに「苦手な教科の成績をあげる勉強方法」などの因子負荷量が高いので「進学情報因子」と呼ぶ。

同様に、第2因子で因子負荷量が高いのは、「高校生ができそうなアルバイト」や「とれそうな資格」、それから「はやっている持ち物の紹介」や「レコードやテープを安く手に入れる方法」などから、「下位文化情報因子」と呼ぶ。第3因子は、「異性へのプロポーズの仕方」や「異性からのもて方の紹介」から「異性情報因子」、第4因子は、「部活動と勉学の両立を紹介したもの」「部活動が強くなる方法」から「部活動情報因子」と呼ぶ。そして第5因子は「減量の仕方を紹介したもの」1つであったが、「美容情報因子」とでも呼んでおく。

また、各因子の説明率をみると進学情報因子が49%、下位文化情報因子が28%で、両方合わせると8割近くになる。ということは、高校生が欲している情報は、ほぼこの2つの因子で説明がつくことになる。

それでは、欲しい情報は音楽感度とどのように結びついているのであろうか。それを調べたものが図V－3である。これは、各因子負荷量の高い13項目を音楽高感度と低感度の者別に示してある。なお、図は両者の差が大きい順に示してある。

図からわかるように、興味深い事実が読みとれる。音楽高感度の者は、低感度の者に比べて当然ながらも、レコードやテープを安く手に入れる方法が欲しい(82%：39%)。そしてそれだけでなく、高校生の間ではやっている持ち物やアルバイトの紹介、それに高校生にとれそうな資格の紹介といった情報をも求めている。これらはともに下位文化情報因子である。

また、音楽高感度の者は、異性情報因子の「片想いの異性へのプロポーズの仕方」や「異性からのもて方」などの情報も求めている。

一方、進学情報因子や部活動情報因子、それに美容情報因子においては、両者の間にほとんど差がない。すなわち、音楽高感度の者が低感度の者に比べて、これらの情報を強く欲するとはいえないのである。

したがって、音楽高感度の者は下位文化情報と異性情報を強く求める特徴がある、とい

表V－4　高校生が欲する情報の因子分析

| 因　子 | 第1因子 | 第2因子 | 第3因子 | 第4因子 | 第5因子 |
|---|---|---|---|---|---|
| 名　称 | 進学情報因子 | 下位文化情報因子 | 異性情報因子 | 部活動情報因子 | 美容情報因子 |
| 因子負荷量の高い項目 | 大学の正確な偏差値 (0.80889) | アルバイトの種類の紹介 (0.65557) | 異性へのプロポーズの仕方 (0.75663) | 部活動と勉学の両立の紹介 (0.80648) | 減量の仕方を紹介したもの (0.41031) |
| | 大学の卒業生の就職先 (0.80552) | とれそうな資格の紹介 (0.59359) | 異性からのもて方の紹介 (0.73841) | 部活動が強くなる方法 (0.57065) | |
| | 大学の教授の研究テーマ (0.73450) | はやっている持ち物の紹介 (0.51855) | | | |
| | 苦手な教科の成績をあげる方法 (0.39538) | レコードやテープを安く手に入れる方法 (0.45174) | | | |
| 説明率 | 49.0% | 27.5% | 9.5% | 9.0% | 5.0% |

える。また図は割愛したが、マンガを除く雑誌・週刊誌の購読冊数別に見たほしい情報も、ほぼ同じ結果であった。つまり、月に雑誌を5冊以上読んでいる者は、読んでいない者(0冊）に比べて、下位文化情報と異性情報を強く欲している。かくて、情報社会の申し子たちが欲しているのは、進学や部活動などの学校文化に適応した情報よりも、学校文化から多少逸脱ぎみの情報である。

それでは、高校生の欲する情報は、学校の種類によってどうなっているのだろうか。それを調べたのが表Ｖ－５である。表中の数値は、「とても」と「かなり」ほしいと答えたものを示している。

ここでは、先の音楽感度や雑誌購読冊数とは異なった傾向が読みとれる。すなわち、進学情報因子は、ほとんど都市工業高校→都市非進学校→地方非進学校→都市進学校→地方進学校と数値が増えている。進学校になるにしたがい進学情報を欲するようになる。その典型が地方進学校で、そこの生徒は、進学情報だけでなく、部活と勉強を両立させる情報も求めている。

一方、下位文化情報因子や異性情報因子などは、地方非進学校と都市工業高校の数値が高い。しかし、都市非進学校はこれらの数値がそれほど高くない。また、都市進学校は、レコードやテープの入手方法に見られるように、数値が一番高い。

このように、進学情報因子以外は、進学－非進学という軸では説明がつかない。例えば、資格やアルバイトの紹介は都市の工業高校、そして流行している持ち物やプロポーズの仕方は地方非進学校というように、高校によって欲する情報が異なっている。高校生が必要とする情報メディアでもそうであったが、欲する情報においても下位文化や異性に関する情報は、従来の進学－非進学という軸は通用しない。

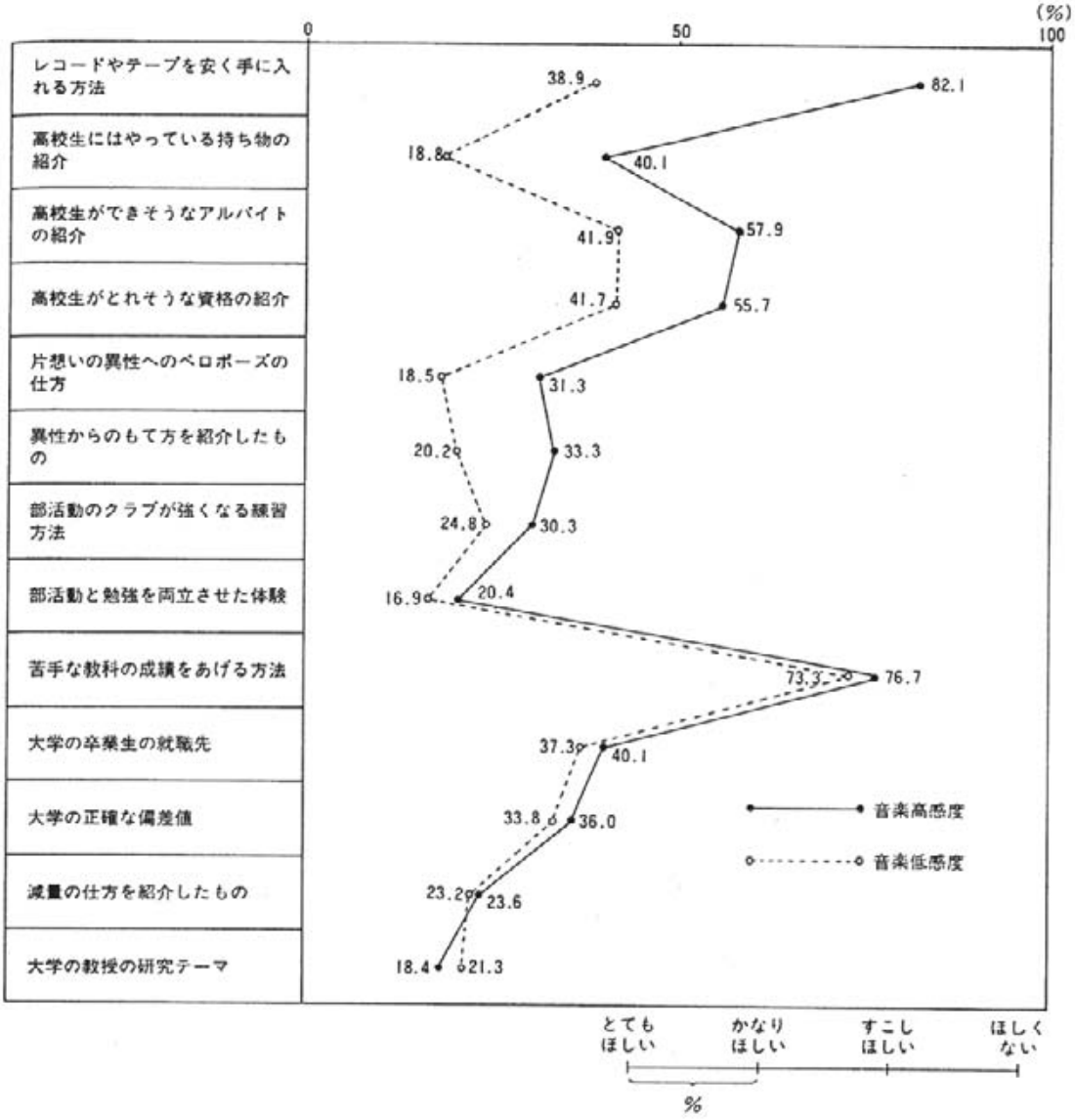
今の高校生は情報社会の申し子というにたがわず多情報の中、ほしい情報をたくみに選択している。彼らは、音にうるさく雑誌の情報に敏感に反応している。いわゆる情報高感度の人間である。したがって、彼らは映画やレコード・テープ、それに雑誌（マンガを除く）などのメディアがこの世の中からなくなると、とても困ると答える。

そして、彼らが欲している情報は、アルバイト情報や高校生のときとれる資格、それに流行している持ち物、異性とのつき合い方などで、学校文化になじみにくいものである。興味深いことに、こうした高校生の下位文化に関する情報を求める傾向は、従来用いられてきた進学－非進学という軸で説明がつかない。それよりも、例えば都市進学校が映像メディア、地方進学校が活字メディアを大切にしているように、都市－地方という軸の方が説明できる場合がある。

もちろん進学情報に関しては従来のタームで説明できるのだが、それ以外の情報では都市－地方という軸や、高校生の音楽感度それに雑誌への接触度の方が説得力がある。

情報は当然ながら地域を越えて均等に流れる。地域差がなくなるというのが情報社会の1つの特徴と言われてきたが、データはそれと逆のことを物語っている。欲する情報や必要とする情報メディアに地域差が見られるのである。そして、それは単なる地域差ではなく、学校格差と混合された形としてあらわれている。

図Ⅴ－3　ほしい情報×音楽感度



## 表Ⅴ－5　ほしい情報×学校タイプ（男子）

(%)

| | 大学生の就職先 | 大学の偏差値 | 教授の研究テーマ | レコードやテープの入手方法 | クラブの練習方法 | クラブと勉強の両立体験 | 減量の仕方 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 地方進学校 | 64.1 | 58.7 | 46.7 | 63.7 | 34.4 | 26.3 | 9.3 |
| 都市進学校 | 57.5 | 57.5 | 36.9 | 71.3 | 28.1 | 15.0 | 10.7 |
| 地方非進学校 | 36.1 | 40.1 | 14.1 | 70.6 | 52.0 | 24.3 | 8.5 |
| 都市非進学校 | 33.7 | 30.8 | 15.7 | 60.4 | 23.3 | 16.0 | 12.5 |
| 都市工業高校 | 16.8 | 11.0 | 4.8 | 70.0 | 20.1 | 11.1 | 13.0 |

| | 苦手な勉強の仕方 | 資格の紹介 | アルバイトの紹介 | はやりの持ち物 | プロポーズの仕方 | 異性からのもて方 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 地方進学校 | 83.8 | 37.9 | 39.8 | 24.3 | 26.6 | 25.6 |
| 都市進学校 | 77.5 | 48.2 | 43.1 | 23.8 | 26.9 | 25.0 |
| 地方非進学校 | 80.8 | 50.9 | 55.4 | 31.6 | 31.0 | 26.6 |
| 都市非進学校 | 69.0 | 41.8 | 48.4 | 24.7 | 25.1 | 25.9 |
| 都市工業高校 | 65.1 | 56.9 | 54.5 | 29.8 | 29.8 | 31.8 |

とてもほしい　かなりほしい　すこしほしい　ほしくない

%

◯＝最も高い数値
▬＝一番低い数値